

北欧の工芸

ナチュラル

自然が生み出す

Scandinavian Craft Works

Fostered by Nature

ごあいさつ

当館には明治から昭和の時代にかけて世界各国から皇室へ贈られた美術工芸品が数多く収蔵されており、その内容の多彩さが収蔵品の一つの特色となっています。このたびは、近年、北欧デザインと呼ばれて多くの人々に親しまれるようになった北欧の国々の工芸に焦点を当て、その魅力と特徴を紹介します。

本展で取り上げる工芸作品は、陶磁、ガラス、金工、染織を含むもので、世界的にも著名なデザイナーが関与した作品を始めとして、いずれも熟達した職人の手になるものです。これらの中には、優れたデザイン感覚によるシンプルな造形のものや、愛らしく親しみやすい作品も少なくありません。清涼感のあるガラス作品の美しさは、澄み切った北欧の空気を感じさせる魅力があります。また、陶磁器に見られる深みのある落ち着いた色遣いや、その一方で荒々しい陶土の質感をいかした作風など、素材の風合いをいかす制作姿勢には、私たちも共感を覚えるのではないのでしょうか。これらの特徴は、北欧の雄大な自然の恵みを受けて生活を送る人々の感覚に根ざしたものと言えるでしょう。

近代の早い時期からわが国が交流を重ねてきた北欧の国々の工芸作品を通じて、その洗練された美に注目するとともに、もの作りに寄せる深い心に触れていただければ幸いです。

平成28年1月

宮内庁三の丸尚蔵館

Foreword

The Sannomaru Shozokan has a large amount of art and craft works presented to the Imperial Household from various countries of the world during the Meiji to Showa periods, and the wide variety in content is one of the characteristics of this collection. In this exhibition, we will focus on craft works of Scandinavia, known well recently as Scandinavian designs, and introduce their charm and features.

The works exhibited include ceramics, glass, metalwork and textiles, all created by skillful craftsmen, including works with famous designers involved. Among these are simple forms with superb design sense, and many are sweet and charming. The beauty of the refreshing glass works seems to make one feel the clear air of Scandinavia. Furthermore, many will probably sympathize with the attitude in creativity utilizing the features of the material, such as the ceramic style with profound serene colors, and the rough texture of clay. These characteristics probably come from the senses of people living receiving the blessings of the vast Scandinavian nature.

We hope our visitors can understand the deep feelings within the craftsmanship along with the refined beauty, through the craft works of the Scandinavian countries which have repeated relations with our country from the beginning of the modern era.

January, 2016

The Museum of the Imperial Collections,
Sannomaru Shōzōkan

宮内庁三の丸尚蔵館所蔵 出品作品一覧 (第71回 北欧の工芸—自然が生み出す)

作品番号	作品名	作者名	員数	時代	ページ
1	デンマーク汽船図花瓶	(制作) ロイヤル・コペンハーゲン社、(絵付) クリスチャン・ベンジャミン・オールセン/デンマーク	一对	1928年	p. 8-9
2	デンマーク帆船図花瓶	ロイヤル・コペンハーゲン社/デンマーク	一点	1923~1928年	p. 9
3	風景絵皿	ロイヤル・コペンハーゲン社/デンマーク	一点	1923~1934年	p. 10
4	人魚像絵皿	ロイヤル・コペンハーゲン社/デンマーク	一点	1961年	p. 10
5	染付草花文壺	ロイヤル・コペンハーゲン社/デンマーク	一点	1970年	p. 11
6	クチナン図花瓶	ロイヤル・コペンハーゲン社/デンマーク	一点	1957年	p. 12-13
7	白磁彫文鉢	ロイヤル・コペンハーゲン社/デンマーク	一点	1957年	p. 12-13
8	シャクナゲ図花瓶	ロイヤル・コペンハーゲン社/デンマーク	一点	1962年	p. 12
9	フローラ・ダニカ 蓋付深鉢	ロイヤル・コペンハーゲン社/デンマーク	一点	1968年	p. 14
10	フローラ・ダニカ 蓋付深鉢	ロイヤル・コペンハーゲン社/デンマーク	一点	1968~1971年	p. 15
11	少女とガチョウ	(制作) ビング・オー・グレンダール社、(原型) アクセル・ロッハー/デンマーク	一点	1948~1951年	p. 16
12	フォルスター島の民族衣装の婦人	(制作) ロイヤル・コペンハーゲン社、(原型) カール・マーチン=ハンセン/デンマーク	一点	1955年	p. 17
13	大鎌を持つ収穫人	(制作) ロイヤル・コペンハーゲン社、(原型) クリスチャン・トムセン/デンマーク	一点	1960年	p. 16
14	ブルー・フィッシューシーラカンス	(制作) ロイヤル・コペンハーゲン社、(原型) ジャンヌ・グリュウ/デンマーク	一点	1971年頃	p. 18
15	淡青緑釉碗	カール=ハリー・ストールハーネ (ロールストランド製陶所) /スウェーデン	一点	1950年代前半	p. 21
16	餡釉櫛搔文台付鉢	(制作) グスタフスベリ製陶所、(デザイン) ヴィルヘルム・コーゲ/スウェーデン	一点	1957年	p. 20
17	鉄釉方形花瓶	(制作) グスタフスベリ製陶所、(デザイン) スティグ・リンドベリ/スウェーデン	一点	1970年代後半	p. 19
18	ガラス蓋付壺 (王冠に葉文様)	(制作) オレフォス社、(デザイン) エードヴァルド・ハルド/スウェーデン	一点	1923年	p. 22

19	ガラス蓋付壺（紋章に紐飾文様）	（制作）オレフォス社、 （デザイン）エードヴァ ルド・ハルド／スウェー デン	一点	1926年	p. 23
20	熱帯魚文ガラス花瓶	（制作）コスタ社、（デ ザイン）ヴィッケ・リン ドストランド／スウェー デン	二巻	1950年代	p. 24
21	富士山図ガラス置物	コスタ社／スウェーデン	二点	1969年	p. 25
22	花卉文ガラス台付鉢	（制作）コスタ社、（デ ザイン）リーサ・パウ アー／スウェーデン	一点	1979年	p. 26
23	リンネソウ文ガラス台付鉢	（制作）コスタ社、（デ ザイン）リーサ・パウ アー／スウェーデン	一点	1979年	p. 27
24	香水瓶	コスタ社／スウェーデン	二点	1960年代	p. 27
25	渦巻文ガラス皿	（制作）コスタ社、（デ ザイン）モナ・モラレス ＝シルト／スウェーデン	一点	1970年	p. 28
26	ボーイスカウト紋章入ガラス花瓶	オレフォス社／スウェー デン	一点	1980年	p. 29
27	国際連合紋章入ガラス花瓶	（制作）オレフォス社、 （デザイン）オーレ・ア ルベリウス／スウェーデ ン	一点	1982年	p. 29
28	ガラス花瓶「四季」	フィン・リンガード／デ ンマーク	四点	1981年	p. 30
29	花畑に子どもの図ガラス花瓶	（制作）ハーデラン社、 （デザイン）ベンニ・ モッツファイト／ノル ウェー	一点	1962年	p. 31
30	白熊	ハーデラン社／ノル ウェー	一点	1983年	p. 32
31	霰文ガラス花瓶	ハーデラン社／ノル ウェー	一点	1983年	p. 33
32	薄紫色ガラス花瓶	セヴェリン・ブロービー ／ノルウェー	一点	1987年頃	p. 33
33	縞文ガラス花瓶	（制作）ヌータヤルヴィ 社、（デザイン）オイ ヴァ・トイッカ／フィン ランド	一点	1980年代	p. 36
34	ガラス花器「花」	（制作）イッタラ社、 （デザイン）アル ヴァー・アールト／フィ ンランド	一組（四点）	1985年（制作） 1938年（デザイン）	p. 34
35	ガラス鉢「小さな湖」	（制作）イッタラ社、 （デザイン）タピオ・ ヴィルカラ／フィンラン ド	一点	1985年（制作） 1966年（デザイン）	p. 35
36	銀製燭台	A. ミケルセン社／デン マーク	一点	1920年代	p. 38
37	銀製盆	（制作）F. ヒンゲルベ ア社、（デザイン）ス ヴェン・ヴァイラウフ／ デンマーク	一点	1963年頃	p. 38

38	銀製鉢・銀製水差	(制作) ジョージ・ジェンセン社、(デザイン) シグヴァルド・ベルナドッテ/デンマーク	二点	1971年頃	p. 37
39	銀製盃	C.G. ホルベリ社/スウェーデン	一点	1894年	p. 40
40	銀製鍍金蓋付深鉢	C.F. カールマン社/スウェーデン	一点	1928年	p. 39
41	銀製鉢	ビルイェル・ホグラン/スウェーデン	一点	1964年	p. 40
42	銀製鳥文盆	(制作) J.A. タルキアイネン社、(デザイン) ペッカ・ピエカネン/フィンランド	一点	1985年	p. 41
43	銀製青色七宝飾皿	(制作) J. トストルップ社、(デザイン) グレーテ・ブリッツ・キッテルセン/ノルウェー	一点	1957年頃	p. 42
44	銀製緑色七宝飾皿	(制作) ダヴィッド・アンデルセン社、(デザイン) ハリー・ソービー/ノルウェー	一点	1962年頃	p. 43
45	銀製白色七宝飾皿	ダヴィッド・アンデルセン社/ノルウェー	一点	1978年	p. 43
46	敷物「カササギの樹」	(制作) ノルディスカ・コンパニエ社、(デザイン) ウーラ・シューマツヒェル=ベルシイ/スウェーデン	一点	1964年頃	p. 44

目次

- 2 — ごあいさつ
- 3 — Foreword
- 5 — 北欧の工芸はなぜ魅力的なのか
- 7 — 図版・解説
 - 8 陶磁／Ceramics
 - 22 ガラス／Glass
 - 37 金工／Metalwork
 - 44 染織／Textiles
- 45 — 旧秩父宮家とスウェーデンの国際親善
- 49 — (参考) 北欧関連地図
- 50 — (参考) 皇室と北欧五カ国のご交流～関連年表
- 52 — 出品目録
- 54 — List of Exhibits

凡例

- 一、本図録は、平成28年1月9日(土)～3月6日(日)までを会期とする展覧会「ナチュラ北欧の工芸—自然が生み出す」の解説図録である。
- 一、本図録に掲載する作品番号は、展示番号と一致する。
- 一、展示作品はすべて三の丸尚蔵館の所管である。
- 一、出品作品の寸法の単位はcmで、原則として径(D)、高さ(H)、または奥行×幅×高さの順で記した。
- 一、本展覧会の企画は、三の丸尚蔵館学芸室主任研究官・岡本隆志が担当し、同主任研究官・五味聖が補佐した。
- 一、本図録の解説は、5、6頁の概説と45～47頁のコラムを岡本が担当した。また、作品解説については、陶磁(作品番号1～17)とガラス(同18～35)、参考作品3を岡本、金工(同36～45)と染織(同46)、49、50頁の年表を五味が担当した。
- 一、本図録掲載の写真は、当館が保管するフィルムおよびデジタル画像等による。このうち、デジタル画像については福島省、佐野順一(株式会社インフォマージュ)が撮影した。

北欧の工芸はなぜ魅力的なのか

北欧諸国の優れたデザインによる建築や家具は、20世紀半ばには北欧デザインという分野を形成して、現在では世界的にも高く評価され、多くのデザイナーに影響を与えている。遠く離れたわが国でも北欧の雑貨を日常の生活に取り入れることは、すでに珍しくなくなって久しい。それほど広く一般的に浸透した北欧デザインの魅力とはどこにあるのだろうか。

本展で紹介する作品の多くは、大正期から昭和期にかけて北欧諸国の王室や首脳からわが国の皇室へ贈られた品々である(各作品解説と50、51ページの関連年表を参照)。それらの中には、アール・デコの時代の特徴を備えた貴重な作品や、スカンディナヴィアン・モダンと呼ばれて1950～60年代に一世を風靡した時期の作品も含まれている。わが国の工芸との比較や関わりにふれつつ、陶磁、ガラス、金工の出品作品から北欧工芸の特質について紹介していきたい。

陶磁

本展で紹介したデンマークとスウェーデンのやきものはそれぞれ異なる性格をもっている。ロイヤル・コペンハーゲンに代表されるデンマークのやきものは、19世紀末には透明釉の下に絵付けをほどこす釉下彩の技法を確立し、農業国であるデンマークの自然と調和した生活の様子や、のどかな風景を淡い色調で描写した作品を発表している。その独特の風情のある色合いを、北欧の静謐な風景を好んで描いた日本画家の東山魁夷は次のように言い表した(東山魁夷『白夜の旅』新潮社、昭和38年)。

コペンハーゲンの街の上を蔽っているグレーの空。そのグレーは鳩の胸毛のようにやわらかで変化のある色調を持ち、その間に見える明るい青空との諧調が、この都の自慢の陶芸であるロイヤル・コペンハーゲンの絵付けの色に、実によく似通っている。この陶器は、はっきりした色や強い色は一つもなくて、やわらかな中間色だけで焼きあげてある。

ロイヤル・コペンハーゲンは、19世紀のジャポニズムの時代には他のヨーロッパの国々と同様に日本美術の影響を受けていた。そのことも理由の一つかもしれないが、彼らが「やわらかな中間色」で描くデンマークの空の描写は、あっさりとした水彩などの淡彩画を好む日本人の心性とどこか通じるものがある。

スウェーデンの作品は、形や色、そして何よりも陶土の風合いが意識されているのが特徴である。ヴィルヘルム・コーゲがデザインしたグスタフスベリ製陶所の《飴釉櫛搔文台付鉢》(作品番号16)は、奇抜な器形と濃淡のある飴釉が縞模様となり、どこか木製品の質感を思わせるユニークな作品である。コーゲは

昭和31年(1956)に来日し、柳宗悦や濱田庄司ら日本在来の手工芸を再評価した民芸運動の人々と交流を深めた。その一方で、当時の日本は戦後の経済復興の真只中にあり、欧米の製品を模倣した安価な工業製品により国際的な摩擦を引き起こしていたため、コーゲは帰国後に美術雑誌上においてその問題を冷静に指摘し批判を行った。コーゲは機械工業化を押し進める日本の現状を憂いながらも、日常生活から駆逐されつつあった日本の伝統的なやきものの美しさや特質に注目し、自らの作陶に活かそうとしたのである。コーゲの継承者であるスティーグ・リンドベリや同時代のカール＝ハリー・ストールハーネの作品(作品番号15、17)が、東洋陶磁の影響のもとに釉薬や造形を洗練させていったことも、スウェーデンの陶芸家の時代や洋の東西を問わない進取の精神を示している。

ガラス

スウェーデン南部のスモーランド地方は、ガラスの製産に適した豊富な森林と水資源のある土地で、19世紀半ばには数多くのガラス工場が設立されるようになり、北欧のガラス工芸を牽引した地域として知られている。オレフォス社の専属デザイナーであったエドヴァルド・ハルドのデザインによる《ガラス蓋付壺》(作品番号18、19)は、王室の依頼で制作された北欧のアール・デコ期の名品である。薄手に作られたガラスの表面をエングレーヴィング技法(研磨剤をまぶした回転する銅盤によって文様を削り出す技法)によって表された繊細かつ優美な文様は、ハルドの洗練されたデザインのみならず、熟練した加工職人の手を経て生みだされたものである。その後、ハルドはエングレーヴィングによる表現だけではなく、ガラスそのものの自由な造形や色合いに作品制作を転換していくが、それは20世紀半ば以降の北欧のガラス工芸の変化でもあった。コスタ社のヴィッケ・リンドストランド(作品番号20)やモナ・モラレス＝シルト(作品番号25)の作品は、器としての要素を兼ね備えながら、素材としてのガラスの可能性を実感させる。

北欧デザインの特徴の一つとして挙げられる機能性を追求したのがフィンランドのガラスである。アルヴァー・アールトのデザインによる複数の花器を組み合わせた作品(作品番号34)は、その一つ一つを分けたとしても使用することができ、また作られた時代の新旧に関わらず他の器と一緒に使用しても違和感がないよう、普遍的なデザインがなされている。だが、ドイツのバウハウスを筆頭とする、20世紀前半のモダン・デザインの無駄を削ぎ落とした無機質な造形とは異なり、アールトの北欧

の大自然に根ざしたデザインには大らかさやゆったりとした余裕がある。昨年、わが国は琳派誕生400年を寿ぎ、光琳や乾山が残したみやびな作品の数々をあらためて賞翫した。これだけの長い間にわたり、同じデザインを飽かずに愛好してきた私たちならば、アールトが目指した境地を理解することができよう。

さて、琳派に敷衍して言うならば、昨今注目される日本美術の可愛らしさがあるように、あえて指摘するまでもなく、北欧の工芸にも可愛らしさがある（それはわが国の北欧雑貨に対するイメージの大部分を占めるだろう）。デンマークのフィン・リングードの作品（作品番号28）は、「四季」と題して4点の花瓶それぞれ色を分けて春夏秋冬を表す。厳しい気候条件の北欧のなかでは最も温暖とされるデンマークの牧歌的な風景が、先に見たスウェーデンやフィンランドのガラスとは全く趣を変えて表現されている。ノルウェーのベンニ・モッツファイトがデザインしたのは、ガラスの透明感をいかして花瓶の手前と後ろのエングレーヴィングの文様を重ね合わせて見せる幻想的な作品である（作品番号29）。花々が咲き誇るのは、北欧の人々が一年のうち最も生活を謳歌する夏の季節。後ろ姿で花畑に座る少女の視線の先にあるのは光り輝く太陽だ。子どもの頃の夏休みの楽しい思い出は一生忘れないものだけれども、一体どのような意味を込めて作られたのか何とも不思議な光景だ。これらの一見可愛らしく見える作品には、私たちの中の童心を呼び起こす懐かしさや、暖かみに心が解き放たれる不可思議な魅力がある。

金工

北欧の金工、特に銀細工は、陶磁やガラスに比べて格段に古い歴史を持っている。北欧に限らず、カトラリー（ナイフ、フォーク、スプーン類）を中心としたヨーロッパの銀細工の歴史は古く、デンマークやスウェーデン、ノルウェーなど王室のある北欧の国々でも銀製品は盛んに作られていた。これらの金工職人はヨーロッパ各地を渡り歩いて、行く先々で技術を身につけ、それをまた伝播していくということを世代を超えて繰り返してきた。また、金工は永く伝わった伝統的な規範により、他の分野ほど地域的な特徴に大きな差異はない。しかし、数々の銀製品が揃った本展の出品作品を見るかぎり、やはりそこに北欧らしさを感じさせるものが少なからずあることは確かだ。

北欧デザインの最大の特徴である簡素さは、金工作品にも当てはまる。スウェーデンのビルイェル・ホグランの鉢（作品番号41）では装飾的な要素はほとんど除かれ、あるのは見込み中央のわずかな突起と全体を蔽う鍍目だけである。ホグランは教会のために祭壇で用いる銀器を制作してきた作家である。その作品には茶道具に用いられる砂張の建水のように質素でありながら、高い精神性を読み取ることのできるだろう。

シンプルでいて見る者をハッとさせる鮮やかさがあるのが、

ノルウェーのJ.トストルップ社やダヴィッド・アンデルセン社のエナメルをほどこした銀製品である（作品番号43～45）。銀器の表面をエナメルで均質にコーティングしてあり、一見するとガラスのようでもある。だが、その下に彫られた文様がうっすらと透けて見えるため、単なる銀製皿やガラス皿にはない独特の深みのある表現となる。日本の近代七宝では透明の七宝釉の下層にある銀の地紋を見せる技法があり、それを銀張七宝と呼んでいる。とはいえ、ここまで装飾的な要素が抑制された七宝の表現は日本にはなく、その手加減の絶妙さが生み出した美であると言えよう。

北欧に学ぶ

ここまで北欧と日本の工芸の親和性をみてきたが、最後に日本が北欧に学んだ例の一つ紹介しておきたい。色絵磁器の重要無形文化財保持者として知られる加藤土師萌は、昭和32年（1957）のアメリカ滞在の帰路にデンマーク、スウェーデン、フィンランドを訪問した。戦前から世界各国の製陶事情を勤勉に調査し自らの作陶活動にいかしていた加藤は、このときもフィンランドのヌータヤルヴィ社を訪れ、そのガラス工場デザイナーをしていたカイ・フランクに面会している。その折に加藤がフランクのアトリエを描いたスケッチが残されている（参考作品3）。フランクはヌータヤルヴィ社のほか、アラビア製陶所のデザインでも画期的な作品を発表しており、ガラス、陶磁、染織、家具など、ジャンルを問わない幅広い活動を行ったことで知られる。フランクは、1950年代にかけてミラノ・トリエンナーレや北欧のデザイナーにとって最も名誉あるルニグ賞などの受賞を重ね、すでにフィンランドのモダン・デザインの世界では不動の地位を築いていた。ちょうど同時期に、加藤の息子である達美も日本貿易振興会（JETRO）の産業意匠研究員としてデンマークに留学しており、加藤の訪問の年にはカイ・フランクの口添えによりアラビア製陶所で制作活動を行っていた。翌年、達美は帰国すると、北欧での制作経験をもとに国産陶磁器のデザインなど、わが国におけるモダン・クラフトの中心的なデザイナーの一人として活躍することになる。東洋陶磁の深奥を知り尽くした加藤土師萌と、真新しい北欧デザインが生み出される現場で過ごした達美、北欧を訪れた二人の陶芸家にその経験がどのような影響を与えたのか興味は尽きない。

（岡本隆志／当館学芸室主任研究官）

※本概説の執筆にあたり、愛知県陶磁美術館・長久智子氏の次の論考を参照しました。また、長久氏には本展の開催準備でもご協力いただきました。ここに記して御礼申し上げます。

「北欧陶磁のモダニズムと民藝—1950年代から1970年代を中心に—」（展覧会図録『モダニズムと民藝 北欧のやきもの：1950's-1970's デンマーク、スウェーデン、ノルウェー、フィンランド』所収、愛知県陶磁美術館、平成26年）



1左



1右



左の花瓶の高台内染付銘



右の花瓶の高台内染付銘

1

デンマーク汽船図花瓶 1対

(制作) ロイヤル・コペンハーゲン社、
(絵付) クリスチャン・ベンジャミン・オールセン／デンマーク

1928年

陶磁

各D22.0 H42.5

昭和3年(1928)、即位の礼に際して、デン
マーク王国国王クリスチャン10世より

Pair of vases with Danish
steamship design

Royal Copenhagen (production), Christian
Benjamin Olsen (ceramic painting)

/ Denmark

1928 / ceramic

gift from King Christian X of Kingdom of
Denmark, on the occasion of the Ceremony of
Enthronement of Emperor Showa in 1928

2

デンマーク帆船図花瓶 1点

ロイヤル・コペンハーゲン社／デンマーク

1923～1928年

陶磁

D12.2 H30.0

香淳皇后御遺品

Vase with Danish sailboat design

Royal Copenhagen / Denmark

1923-1928

ceramic

relic of Empress Kojun



2

この2作品は周囲を海に囲まれたデンマークらしく、同国が誇った当時の汽船、帆船をモチーフとした花瓶である。作品番号1は、昭和3年(1928)の即位の礼に際して、デンマーク王国国王クリスチャン10世より贈られた品で、底部の銘からデンマーク海軍の公式画家としても活動したクリスチャン・ベンジャミン・オールセン(1873～1935)による絵付けであることがわかる。左の花瓶には、コペンハーゲンとニューヨークを往復した客船HELLIG OLAV号が、首都コペンハーゲンの市庁舎やフレデリクス教会を背景に描かれている。また、右の花瓶には、ヘルシンゲルにあるクロンボー城を通過するKOLDINGHUS号とNIELS EBBESEN号が、それぞれ正面と裏面に描かれている。ヘルシンゲルはコペンハーゲンから北へ30キロ、スウェーデンと対峙するエーレスンド海峡に面しており、バルト海と北海を結ぶため古くから交通の要衝として栄えた。また、クロンボー城はシェイクスピアの『ハムレット』の舞台として知られている。

作品番号2は、香淳皇后の御遺品の一つで、昭和8年に薨去された朝香宮妃允子内親王(明治天皇第八皇女子)ゆかりの品と伝えられる。允子内親王は朝香宮鳩彦王とともに1920年代にフランスに約二年間滞在されており、制作年代からその間に購入されたものとみられる。



3



4

3
風景絵皿 1点

ロイヤル・コペンハーゲン社/
デンマーク

1923～1934年
陶磁

D25.3 H3.0

秩父宮家旧蔵品

Dish with scenery

Royal Copenhagen / Denmark

1923-1934
ceramic

formerly owned by Prince Chichibu
Family

4
人魚像絵皿 1点

ロイヤル・コペンハーゲン社/
デンマーク

1961年
陶磁

D21.7 H3.6

昭和37年(1962)、秩父宮勢津子
妃の御訪欧の折、デンマーク王
国王族アクセルより

Dish with mermaid figure

Royal Copenhagen / Denmark

1961 / ceramic

gift from Prince Axel of Kingdom of
Denmark, when Princess Chichibu
Setsuko visited Europe in 1962

ロイヤル・コペンハーゲン社の器は、穏やかな色調の釉下彩技法による写実的な絵付けで知られている。器の中でも比較的曲面が少なく絵付けに適した皿には、デンマークの美しい風景が描かれた作例が少なくない。

作品番号3は、昭和12年(1937)に秩父宮雍仁親王と勢津子妃が昭和天皇の御名代として英国王ジョージ6世の戴冠式参列のため御訪欧の折、お買い上げになったものである。爽やかな夏空の下、草むらの先の木立に隣接する船着き場を前景に、入江を挟んでその向こうには島影が描かれている。作品番号4は、昭和37年7月に勢津子妃がデンマークご訪問の折、同国王族アクセル殿下より贈られた品。コペンハーゲンの港の北東部、ランゲルニエ地区の岸辺にある人魚像が描かれている。この像は、デンマークの著名な童話作家アンデルセンの「人魚姫」を元に彫刻家エドヴァルド・エリクセンによって制作されたもので、1913年の完成以降、多くの人々が訪れ、コペンハーゲンの観光名所となっている。



裏面



5 染付草花文壺 1点

ロイヤル・コペンハーゲン社／デンマーク

1970年

陶磁

D21.0 H29.2

昭和45年(1970)、来日のデンマーク王国王女マルグレーテ殿下、同夫君ヘンリック殿下より

Bottle with flowers and grass
design in underglaze blue

Royal Copenhagen / Denmark

1970 / ceramic

gift from H.R.H. the Princess Margrethe and her husband H.R.H. the Prince Henrik of the Kingdom of Denmark, to Emperor Showa when visiting Japan in 1970

1775年に創立されたロイヤル・コペンハーゲン社の前身である王立製陶所は、釉下彩技法を開発する以前にマイセン窯の影響で中国の青花(染付)の模倣から始まった、ブルー・フラワーと呼ばれる技法の作品を1780年頃から制作している。純白の素地に色調を変化させながら青一色で描いたブーケが特徴である。本作品は、ブルー・フラワーの技法を用いて、ブーケのほか、上部に王冠を配したデンマーク王国王女マルグレーテ殿下(現女王マルグレーテ2世陛下)と夫君ヘンリック殿下の横顔、その裏面にはお二人のイニシャル(M/H)によるモノグラムが描かれている。蓋にはブーケの絵付けだけでなく、編み込み細工を模したブルー・フラワーの特徴であるレリーフ表現がみられる。

昭和45年(1970)4月、大阪で開催された日本万国博覧会のため訪日中であった両殿下より昭和天皇へ贈られた。同博覧会には、デンマーク、スウェーデン、ノルウェー、フィンランド、アイスランドの5カ国による、「産業化社会における環境の保護」をテーマとしたスカンディナヴィア館の参加があった。



8
シャクナゲ図花瓶 1点

ロイヤル・コペンハーゲン社／デンマーク

1962年

陶磁

D192 H334

昭和37年(1962)、秩父宮勢津子妃の御訪欧の折、デンマーク王国王族アクセルより

Vase with rhododendron design

Royal Copenhagen / Denmark

1962

ceramic

gift from Prince Axel of Kingdom of Denmark, when Princess Chichibu Setsuko visited Europe in 1962

ロイヤル・コペンハーゲンは1890年代における釉下彩の技術的な進歩により、淡い色調の洗練された作品の数々を生み出し、わが国の近代陶磁にも少なからぬ影響を与えている。白とピンクのクチナシが描かれた作品番号6の花瓶は、昭和32年(1957)3月、スカンディナヴィア航空の北極圏航路開設にあたって、スウェーデン、ノルウェー、デンマークの三カ国の王室、政府の招待により、その第一回記念飛行に三笠宮崇仁親王同妃両殿下がご同乗になり各国を訪問された際、デンマーク王国王族アクセル妃殿下より両殿下を通じて秩父宮勢津子妃殿下に贈られた品である。青いシャクナゲが描かれた作品番号8の花瓶は、同37年7月にデンマークを訪問された勢津子妃殿下にアクセル殿下より贈られた。

作品番号7の抽象的な植物文様が彫り表された白磁の鉢は、ブルー・フルーテッドや釉下彩ではなくモダンなデザインの器であるが、デザイナーは明らかではない。1950年代当時、ロイヤル・コペンハーゲン社のコペンハーゲン本店ギャラリーでは、社内の各デザイナーが個展を開き作品を即売しており、本作もそれらの一つかと思われる。同33年5月に来日したアクセル殿下より勢津子妃殿下に贈られた品である。

6

クチナシ図花瓶 1点

ロイヤル・コペンハーゲン社／デンマーク

1957年

陶磁

D10.4 H22.2

昭和32年(1957)、三笠宮同妃両殿下の御訪
欧の折、デンマーク王国王族アクセル妃より

Vase with gardenia design

Royal Copenhagen / Denmark

1957

ceramic

gift from Princess Margaretha of Kingdom of
Denmark, to Princess Chichibu Setsuko when
T.R.H. Prince and Princess Mikasa visited
Europe in 1957

7

白磁彫文鉢 1点

ロイヤル・コペンハーゲン社／デンマーク

1957年

陶磁

D26.0 H15.0

昭和33年(1958)、来日のデンマーク王国王
族アクセルより

White porcelain bowl with carved designs

Royal Copenhagen / Denmark

1957

ceramic

gift from Prince Axel of Kingdom of Denmark,
to Princess Chichibu Setsuko when visiting Japan
in 1958



9
 フローラ・ダニカ 蓋付深鉢 1点

ロイヤル・コペンハーゲン社/デンマーク
 1968年
 陶磁
 総D28.8 総H18.0
 昭和44年(1969)、来日のデンマーク王国外務大臣夫妻より

Flora Danica, Oval tureen with lid on stand

Royal Copenhagen / Denmark
 1968
 ceramic

gift from Minister of Foreign Affairs of Kingdom of Denmark and his wife, to Emperor Showa when visiting Japan in 1969



9の受皿



10
フローラ・ダニカ 蓋付深鉢
1点

ロイヤル・コペンハーゲン社／デンマーク

1968～1971年

陶磁

総D33.6 総H26.4

昭和46年(1971)、昭和天皇 香淳皇后の御
訪欧の折、ロイヤル・コペンハーゲン社より

Flora Danica, Oval tureen with lid
on stand

Royal Copenhagen / Denmark

1968-1971
ceramic

gift from Royal Copenhagen when Emperor
Showa and Empress Kojun visited Europe in
1971

『フローラ・ダニカ(デンマークの植物)』とは、デンマーク領土内に生育するすべての植物を正確に写生して記録し、1761年に刊行が開始された大部の植物図譜で、1883年に完結するまでに3000葉を越える手彩色銅版画が刊行された。1790年から1803年にかけて、デンマーク王室が王立製陶所に命じて作らせたのが、この植物図譜を原画とするディナー・サーヴィスのフローラ・ダニカである。最先端の知的流行であった植物図譜と希少価値の高い磁器の組み合わせは、ロシアの女王エカテリーナ2世への贈進品とするために企画された制作であったと推測されている。しかし、フローラ・ダニカの完成前に女王が亡くなり、ディナー・サーヴィスはそのままデンマーク王室に所蔵されることとなった。現存する1530点のフローラ・ダニカは、王室の御慶事や特別な機会に使用される最も格式の高い食器となった。

現在でも、オリジナルのフローラ・ダニカをもとにロイヤル・コペンハーゲン社で製産が続けられており、同社の最高級製品として限られた熟練の絵付け師が一点ずつ制作に当たっている。なお、それぞれ器の裏面には描かれた植物の学名が記されており、それらの植物を特定することができる。作品番号9、10とも現代の再制作品であるが、同9は昭和44年(1969)6月に来日したデンマーク王国外務大臣ポール・ハートリング夫妻より昭和天皇へ献上された品。蓋にはキンポウゲ科イチリンソウ属のアネモネの一種、受皿にはスマレが描かれている。一方、同10は同46年9月、昭和天皇・香淳皇后の御訪欧の折、ロイヤル・コペンハーゲン社を訪問された際、記念の品として香淳皇后へ献上された。蓋にはツタバウンラン、身には表裏各面にアルサイク・クローバーとマメ科レンリソウ属の一種、受皿にはセイヨウヒルガオが描かれている。



11

少女とガチョウ 1点

(制作) ビング・オー・グレンダール社、
(原型) アクセル・ロッハー／デンマーク

1948～1951年／陶磁／13.6×12.3×24.2

香淳皇后御遺品

Girl and geese

Bing & Grondahl (production),
Axel Locher (original model) / Denmark

1948-1951 / ceramic

relic of Empress Kojun

13

大鎌を持つ収穫人 1点

(制作) ロイヤル・コペンハーゲン社、
(原型) クリスチャン・トムセン／デンマーク

1960年／陶磁／12.6×13.5×25.3

秩父宮家旧蔵品

Harvester Man with Scyth

Royal Copenhagen (production), Christian
Thomsen (original model) / Denmark

1960 / ceramic

formerly owned by Prince Chichibu Family

19世紀末には、多くのデザイナーによって人や動物などをかたどった磁器製置物のシリーズが盛んに制作され、フィギュリンと呼ばれて親しまれている。作品番号11は香淳皇后の御遺品で、ロイヤル・コペンハーゲンとともにデンマークを代表する陶磁器メーカーのビング・オー・グレンダール(1853年設立)の作品。原型は労働する姿の女性像に優れた作品を残したアクセル・ロッハー(1879～1941)が制作した。

作品番号13はロイヤル・コペンハーゲン社製で、原型は農民の田園生活の様子を得意としたクリスチャン・トムセン(1860～1921)による。昭和36年(1961)7月に駐デンマーク特命全権大使夫人より秩父宮勢津子妃へ献上された。





12
 フォルスター島の民族衣装の婦人 1点
 (制作) ロイヤル・コペンハーゲン社、
 (原型) カール・マーチン＝ハンセン／デンマーク
 1955年／陶磁／9.3 × 10.3 × 32.3
 秩父宮家旧蔵品

Falster from the series of Danish folk costumes

Royal Copenhagen (production),
 Carl Martin-Hansen (original model) /Denmark
 1955 / ceramic
 formerly owned by Prince Chichibu Family

釉下彩の作品が多いロイヤル・コペンハーゲンのなかでは珍しい、鮮やかな上絵付けで彩色されたフィギュリン。「デンマークの民族衣装」と題されたシリーズのうちの1点で、カール・マーチン＝ハンセン(1877～1941)が原型制作を行った。ハンセンは1906年から25年の間に同シリーズの原型を47点制作している。このうち42点のフィギュリンは、1923年の国王クリスチャン10世とアレクサンドリーヌ王妃の銀婚式の折、女性国民から贈られた品々に含まれていた。本作品はそのうちの1点を元に制作されたものである。ハンセンは原型の制作に当たって、デンマークの国立博物館などの所蔵品を参照しており、それぞれの地方の民族衣装の細部にまで忠実に再現されている点が高く評価されている。本作品はフォルスター島の伝統衣装を纏う婦人像で、フォルスター島はバルト海の西端、首都コペンハーゲンのあるシェラン島の南に位置する。秩父宮家旧蔵品。

14

ブルー・フィッシューシーラカンス

1点

(制作) ロイヤル・コペンハーゲン社、
(原型) ジャンス・グリュウ／デンマーク

1971年頃

陶磁

55.5 × 110.0 × 18.5

昭和46年(1971)、昭和天皇 香淳皇后の御訪
欧の折、ロイヤル・コペンハーゲン社より

Blue fish, coelacanthRoyal Copenhagen (production),
Jeanne Grut (original model) / Denmark

c.1971 / ceramic

gift from Royal Copenhagen when Emperor Showa
and Empress Kojun visited Europe in 1971

昭和46年(1971)の昭和天皇・香淳皇后の御訪欧では、9月28日にコペンハーゲンにあるロイヤル・コペンハーゲン社の工場を訪問され、陶磁器の成形作業や、同社の代表的な製品であるブルー・フルーテッドやフローラ・ダニカの絵付け作業をご覧になった。その後、工場御訪問の記念品としてこの「ブルー・フィッシュ」が昭和天皇へ献上された。なお、この時、香淳皇后へ献上されたのが作品番号10のフローラ・ダニカである。

シーラカンスは1938年に南アフリカの北東海岸のチャルムナ川沖において生存状態で発見され、「生きた化石」として世界的に知られるようになった魚である。これを1963年に彫塑家ジャンス・グリュウ(1927～2009)が原型を作り、ロイヤル・コペンハーゲンを象徴する深みのある青色の釉薬をかけて作品とした。昭和天皇はこの御訪欧の年、右の御製をお詠みになっている。

いそとせまへの外国の旅にもとめたる陶器すまもの思ひつつそのたくみ場に立つ
大いなるシーラカンスのすまものを室にかざりぬ旅をおもひつつ

〈昭和天皇御製〉

昭和46年

17

鉄釉方形花瓶 1点

(制作) グスタフスベリ製陶所、
(デザイン) スティグ・リンドベリ /
スウェーデン

1970年代後半

陶磁

11.5 × 38.0 × 46.5

昭和56年(1981)、日本スウェーデン協会
より

Square vase, iron glaze

Gustavsberg (production),
Stig Lindberg (design) / Sweden

late 1970's

ceramic

gift from Japan-Sweden Society, to Princess
Chichibu Setsuko in 1981

左右の側面に丸みを持たせ前後の側面を平たく楕円形に成形した花瓶。外側側面の全体に、正方形の中に円形のスタンプ文様で埋め尽くされている。露胎となる底部以外は濃い茶褐色の鉄釉がかかり、その濃淡により明暗の変化のある表現となっている。素朴な加飾表現と重厚な釉薬表現の組み合わせは、1950年代から70年代にかけての北欧陶磁の一つの傾向であるとも言えるだろう。スティグ・リンドベリ(1916～82)のデザインによる一点制作のアート・ピースで、グスタフスベリ製陶所に在籍していた晩年頃の作品であるとみられる。昭和56年(1981)4月、日本スウェーデン協会より秩父宮勢津子妃へ献上された。

リンドベリは、陶芸家、デザイナーとしてだけでなく、挿絵画家としても知られるなど、多彩な能力を発揮した。1937年にグスタフスベリ製陶所に入所し、ヴィルヘルム・コーゲのもとで陶芸を学んだ。1949年にはコーゲから製陶所の芸術監督を引き継ぎ、スウェーデン国立美術工芸学校教授の期間をはさんで、20世紀後半のグスタフスベリ製陶所の活動を牽引した。グスタフスベリ製陶所は、1825年にストックホルム郊外で操業開始し、イギリスの技術と陶土による製品で業績を伸ばした。20世紀に入ってコーゲら優れた芸術監督の下で芸術性の高い製品を作るようになり、1940年代から70年代にかけてコーゲやリンドベリを中心に製陶所のスタッフで組織されたG-Studioは、スウェーデンのセラミック・デザインや陶芸の中心的な存在であった。

16

飴釉櫛搔文台付鉢 1点

(制作) グスタフスベリ製陶所、
(デザイン) ヴィルヘルム・コーゲ/
スウェーデン

1957年

陶磁

D23.4 H20.3

昭和32年(1957)、駐日スウェーデン王国公使より

Bowl with comb scratched pattern,
amber glaze, with a base

Gustavsberg (production),
Wilhelm Käge (design) / Sweden

1957

ceramic

gift from Minister of Kingdom of Sweden to
Japan, to Princess Chichibu Setsuko in 1957

無釉の台から脚部を経て上部で大きく広がる、古代の祭器を思わせる器形の台付鉢。鉢の外面には不規則な縦方向の櫛目文がほどこされ、内面には中心部から放射状に伸びる刻線と轆轤の回転に合わせて彫られた圏線が重なり合って、荒々しい風合いをみせている。また、施釉部分にも濃淡があり横縞の凹凸模様となって、台の轆轤回転の跡とともにスピード感のある斬新な表現となっている。ヴィルヘルム・コーゲ(1889～1960)が、テーブル・ウェアから一点制作のアート・ピースに制作の中心を移した時期の作品で、本作は「ファシュタ(FARSTA)」シリーズのうちの一点。昭和32年(1957)、駐日スウェーデン王国特命全権公使ターゲ・ホルム・フレデリク・グリュンヴァルより、秩父宮勢津子妃へ献上された。コーゲはその前年の同31年来日しており、東京で日本スウェーデン協会の名誉総裁であった妃殿下と面会した写真がスウェーデン国立美術館に所蔵されている。

コーゲはスウェーデンのポスター・デザインの世界で活躍した後、1917年にグスタフスベリ製陶所に芸術監督として迎えられた。スウェーデン工芸協会の活動方針に従って、労働者階級の人々のための機能的で美しいデザインのテーブル・ウェアを発表して高い評価を得た。アール・デコ博覧会として知られる1925年のパリ万博でグラン・プリを受賞するなど、スウェーデンのモダン・デザインに果たした功績は大きく、国王とスウェーデン工芸協会から「プロフェッサー」と名乗ることを許された陶芸界の巨匠として知られている。

15

淡青緑釉碗 1点

カール＝ハリ－・ストールハーネ（ロール
ストランド製陶所）／スウェーデン

1950年代前半

陶磁

D11.9 H9.5

昭和30年（1955）、駐日スウェーデン王国公
使より

Bowl with light bluish green glaze

Carl-Harry Stålhane, Rörstrands / Sweden

early 1950's
ceramicgift from Minister of Kingdom of Sweden to
Japan, to Princess Chichibu Setsuko in 1955

北欧陶磁の特徴の一つとして、釉薬表現に特徴のある掌に収まるくらいの小品の類がある。器形や釉薬表現などは東洋陶磁を意識したとおぼしきものもあり、わが国の陶磁愛好家にも親しみを感じさせる。スウェーデンの陶芸家カール＝ハリ－・ストールハーネ（1920～90）が制作した本作品も、型成形でごく薄手に作られており、茶の湯の器に見立ててもよいほど穏やかな形状をしている。淡い緑と青を基調とした釉薬の色合いは焼成の具合で微妙に変化しており、また禾目天目茶碗のように縦筋状の細かな釉薬の流れがみられ、軽やかでありながら深遠な魅力を湛えている。1950年代のストールハーネの全盛期の作品である。昭和30年（1955）3月に駐日スウェーデン王国特命全権公使カール・グスタフ・ラーガフェルトより秩父宮勢津子妃へ献上された。

ストールハーネはストックホルムで絵画、パリで彫刻を学び、1939年から73年までロールストランド製陶所で活動し、54年にはミラノ・トリエンナーレでゴールド・メダルを受賞した。ストールハーネが所属したロールストランド製陶所は、1726年に王立製陶所としてストックホルムのロールストランドに創立された。優秀なデザイナーを招聘し、グスタフスベリ製陶所と並んで20世紀のスウェーデンを代表するテーブル・ウェアを発表した。

18

ガラス蓋付壺(王冠に葉文様) 1点

(制作) オレフォス社、(デザイン) エードヴァルド・ハルド / スウェーデン

1923年 / ガラス / D25.0 H44.5

大正12年(1923)、翌年の皇太子裕仁親王御成婚の折、スウェーデン王国国王グスタフ5世より

Covered glass jar with crown and leaf design

Orrefors (production), Edward Hald (design)

/ Sweden

1923 / glass

gift from King Gustaf V of Kingdom of Sweden, in 1923, the year before the Imperial Wedding of Crown Prince Hirohito (Emperor Showa)

蓋の摘みを王冠形に成形し、エングレーヴィング技法(グラヴィール)によって様式化された葉の文様を周囲にめぐらせた豪華な蓋付壺。中央には王冠とスウェーデン王国国王グスタフ5世のイニシャル(G/V)のモノグラムが表されている。1920年代になると、オレフォス社はエングレーヴィングによる加飾に力を入れ、22年には装飾技術者を養成するためにエングレーヴィングの専門学校を設立した。本作品のデザインを担当したのは、1917年にオレフォス社に採用され、78年まで在籍中に数々の斬新な作品を発表し、スウェーデンのガラス工芸の第一人者として知られるエードヴァルド・ハルド(1883~1980)である。ハルドはもともとパリでアンリ・マティスから絵画を学び、ガラスのデザインだけでなく画家としても才能を発揮した。本作品は、大正12年(1923)12月、翌年1月の皇太子裕仁親王(昭和天皇)の御結婚のお祝いとして、国王グスタフ5世より贈られた。

19

ガラス蓋付壺 (紋章に紐飾文様) 1点

(制作) オレフォス社、(デザイン) エードヴァルド・ハルド / スウェーデン

1926年 / ガラス / D21.0 H39.5

大正15年(1926)、来日のスウェーデン王国皇太子同妃より

Covered glass jar with crest and string ornament design

Orrefors (production), Edward Hald (design) / Sweden

1926 / glass

gift from Crown Prince and Princess of Kingdom of Sweden, to Empress Teimei when visiting Japan in 1926

作品番号18と同じく、エードヴァルド・ハルドのデザインにより、エングレーヴィングで文様をほどこした蓋付壺である。花瓶の蓋から身にいたるまで、何本もの紐飾りの文様を斜めに交叉させて、その交叉する箇所を蝶結びの図様で表している。紐と紐の間の縦長の菱形の部分にはスウェーデンの各都市の紋章を配し、中央に王冠とスウェーデン王国皇太子グスタフ・アドルフとルイーゼ妃のイニシャル(G/A/L)のモノグラムが表されている。それらに加えて、蓋、身ともに全体に配されているのは、スウェーデン王国の国章の略章である、逆三角形に並んだ三つの王冠である。蓋の摘みも紐飾りの房を模したものである。底裏の彫銘から、オレフォス社、ハルドのほか、彫刻を担当したとみられる「C. Weidlich」の名前が確認できる。大正15年(1926)9月、来日されたグスタフ・アドルフ皇太子とルイーゼ妃より貞明皇后へ贈られた品で、後に秩父宮雍仁親王が拝領された。

オレフォス社のガラス工場は、1898年、スウェーデン南部のスモーランド地方に創立した。当初は食器や板ガラスを手がけていたが、デザイナーとしてエードヴァルド・ハルドとシーモン・ガーテを迎え、他社から優秀なガラス職人を引き抜いて、エングレーヴィング技法による彫刻文様をほどこした芸術性の高いガラス作品を発表して、1925年のパリ万国博覧会でグラン・プリを受賞するなど、名声を博した。

20

熱帯魚文ガラス花瓶 1点

(制作) コスタ社、(デザイン) ヴィッケ・リンドストランド／スウェーデン

1950年代／ガラス／7.0×14.0×22.5

昭和37年(1962)、秩父宮勢津子妃の御訪欧の折、スウェーデン王国国王グスタフ6世アドルフより

Glass vase with tropical fish design

Kosta (production), Vicke Lindstrand (design) / Sweden

1950's / glass

gift from King Gustaf VI Adolf of Kingdom of Sweden, when Princess Chichibu Setsuko visited Europe in 1962

正面から見ると水滴のような形状にして、前後を扁平に宙吹き成形した花瓶。重量感のある厚い作りで、その無色の透明ガラスのなかに緑の色ガラスと大小の気泡を封じ込め、表面と裏面にエンゲレーヴィングにより熱帯魚を一匹ずつ彫り表している。それによって、魚が水草の揺れる水中を泳いでいるかのように表現された作品である。ヴィッケ・リンドストランド(1904～83)によるデザインで、コスタ社で制作された。昭和37年(1962)8月、秩父宮勢津子妃がスウェーデンを御訪問の折、国王グスタフ6世アドルフより贈られた品。

リンドストランドは商業用のイラストなどを描く商業美術出身のデザイナーで、1928年からオレフォス社に入り、ガラス工芸のデザインにたずさわるようになった。一時期、ウブサラエクビー社で陶磁器のデザインも行っているが、50年から73年までコスタ社に芸術監督として所属し、独創的なガラス工芸作品を次々に発表した。



21
富士山図ガラス置物 1点

コスタ社/スウェーデン

1969年

ガラス

総 11.5 × 25.2 × 25.7

昭和44年(1969)、元駐日スウェーデン王国
公使より

Glass ornament of Mt. Fuji

Kosta / Sweden

1969 / glass

gift from former Minister of Kingdom of Sweden
to Japan, to Princess Chichibu Setsuko in 1969

薄緑色の透明ガラスの大きな塊を打ち砕いて片側のみを平滑な面として、そこにエン
グレーヴィング技法によって富士山を彫り表した置物。コスタ社の作品であるが、同社
では作品番号20のデザインを行ったヴィック・リンドストランドの作品として、同様の
手法による動物や魚類などの図様を彫刻した作例が発表されている。ガラスの透明感
と鋭利な造形が氷の塊を思わせる、北欧らしい作品であると言えよう。

昭和44年(1969)9月9日に元駐日スウェーデン王国特命全権公使カール・グスタフ・
ラーガフェルトより秩父宮勢津子妃殿下に贈られた品で、木製の置物台に取り付けられ
たプレートによると、彫刻された図様はラーガフェルト夫人が撮影した富士山の写真を
元にしたものであるという。ラーガフェルト氏は昭和27年から31年にかけて駐日公使
として日本に赴任しており、日瑞協会総裁であった雍仁親王、その後を引き継がれて名
誉総裁となった妃殿下と親交を深められていたとみられ、宮家の御殿場御別邸に両殿
下を訪問された際の写真(46頁参照)や、同氏から献上された作品番号15《淡青緑釉碗》
が秩父宮家旧蔵品として伝わっている。

22

花卉文ガラス台付鉢 1点

(制作) コスタ社、(デザイン) リーサ・パウアー / スウェーデン

1979年 / ガラス / D23.7 H29.5

昭和55年(1980)、国賓として来日のスウェーデン王国国王カール16世グスタフ王妃シルヴィア両陛下より

Glass bowl with flower design, with a base

Kosta (production), Lisa Bauer (design) / Sweden

1979 / glass

gift from H.M. the King Carl XVI Gustaf and H.M. the Queen Silvia of Kingdom of Sweden, to Emperor Showa and Empress Kojun when visiting Japan as State Guests in 1980

1742年にスウェーデン南部のスモーランド地方で創立されたコスタ社は、ヨーロッパに現存する最も古いガラス工場であり、現在はコスタ・ボダ社の名称で知られている。スモーランド地方は19世紀の産業革命以降、ガラス製産が盛んになり、数多くのガラス工場が集中する北欧ガラスの中心地として、毎年100万人の人々が訪れる観光名所でもある。

作品番号22は、昭和55年(1980)4月、国賓として来日されたスウェーデン王国国王カール16世グスタフ王妃シルヴィア両陛下より昭和天皇・香淳皇后へ、作品番号23は同じく秩父宮勢津子妃へ贈られた品で、繊細な植物図様はどちらもリーサ・パウアー(1920～2003)のデザインである。パウアーは1969年から91年にかけてコスタ社に所属したデザイナーである。作品番号24のハート形の栓が付く香水瓶は秩父宮家旧藏品で、昭和37年8月に妃殿下がスウェーデンを訪問された折にお買い上げになったものと推測される。

23

リンネソウ文ガラス台付鉢

1点

(制作) コスタ社、(デザイン) リーサ・バウアー／スウェーデン

1979年

ガラス

D12.7 H14.5

昭和55年(1980)、国賓として来日のスウェーデン王国国王カール16世グスタフ王妃シルヴィア両陛下より

Glass bowl with twinflower design, with a base

Kosta (production), Lisa Bauer (design) / Sweden

1979

glass

gift from H.M. the King Carl XVI Gustaf and H.M. the Queen Silvia, of Kingdom of Sweden, to Princess Chichibu Setsuko when visiting Japan as State Guests in 1980

24

香水瓶 2点

コスタ社／スウェーデン

1960年代

ガラス

各D5.0 総H8.1

秩父宮家旧蔵品

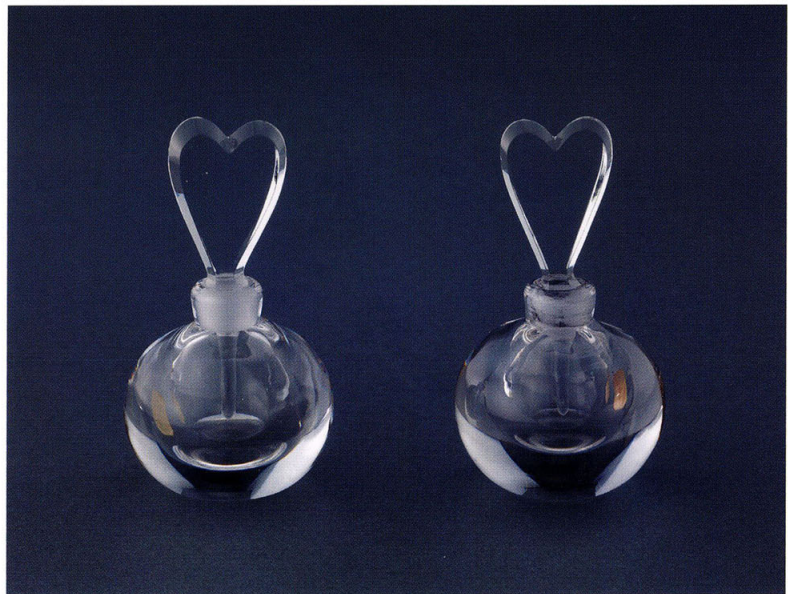
Perfume bottles

Kosta / Sweden

1960's

glass

formerly owned by Prince Chichibu Family



25

渦巻文ガラス皿 1点

(制作) コスタ社、(デザイン) モナ・モラレス=シルト / スウェーデン

1970年 / ガラス / D37.0 H5.9

昭和46年(1971)、来日のスウェーデン王国王女(王孫)クリスティーナ殿下より

Glass dish with spiral pattern

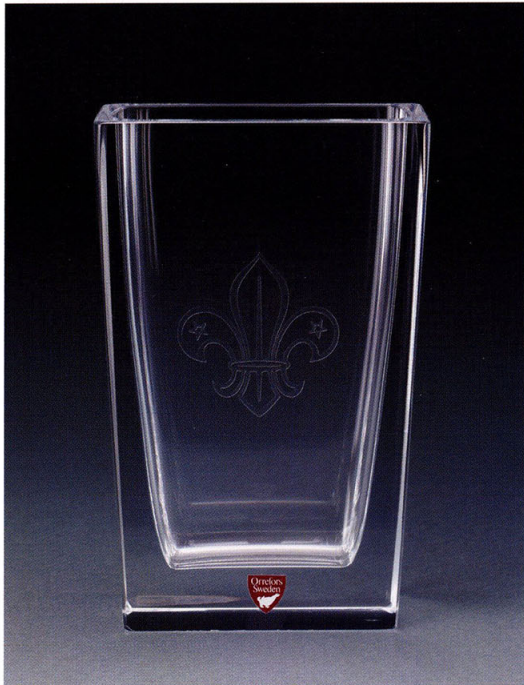
Kosta (production), Mona Morales-Schildt (design) / Sweden

1970 / glass

gift from H.R.H. the Princess Christina (granddaughter of the King) of Kingdom of Sweden, to Princess Chichibu Setsuko when visiting Japan in 1971

ごく薄く緑色がかったグレーの帯が何層にも重なって渦を巻くデザインのガラス皿。宙吹きによって、わずかに歪みをともなう不定形な器形に作られており、底部にはコスタ社とデザイナーの彫銘がある。昭和46年(1971)5月、東京日本橋の高島屋でスウェーデン王国グスタフ6世アドルフ国王御所蔵品による「中国古美術展」が開催された折、同展名誉総裁として来日された王孫クリスティーナ殿下より秩父宮勢津子妃へ贈られた品。

デザインを担当したモナ・モラレス=シルト(1908~99)は、ストックホルムの美術デザイン高等学校を卒業後、パリで広告美術を学んだ。その後、グスタフスベリ製陶所でヴィルヘルム・コーゲの助手を務めたほか、フィンランドのアラビア製陶所を経て、1958年から71年にかけてコスタ社に所属し、初の女性デザイナーとして活躍した。



26
ボーイスカウト紋章入ガラス花瓶
1点

オレフォス社／スウェーデン

1980年

ガラス

5.4 × 10.7 × 16.9

昭和55年(1980)、昭和天皇の御学友より

Glass vase with Boy Scouts crest

Orrefors / Sweden

1980

glass

gift from school friend of Emperor Showa, in 1980

27
国際連合紋章入ガラス花瓶
1点

(制作) オレフォス社、(デザイン) オーレ・アルベリウス／スウェーデン

1982年／ガラス／10.0 × 22.8 × 23.5

昭和57年(1982)、公賓として来日の国際連合事務総長より

Glass vase with the United Nations crest

Orrefors (production), Olle Alberius (design) / Sweden

1982 / glass

gift from United Nations Secretary-General, to Emperor Showa when visiting Japan as Official Guest in 1982

作品番号26は、昭和天皇の御学友であった渡邊昭(1901～2005)より献上された品で、渡邊氏が生涯を通じて尽力したボーイスカウト活動の象徴であるフルール・ド・リス(アヤメの花)が表されている。作品番号27は、昭和57年(1982)8月、公賓として来日中の国際連合事務総長ハビエル・ペレス・デ・クエヤルが那須御用邸を訪問し、昭和天皇へ贈られた品。国際連合の象徴の上に、オーレ・アルベリウス(1926～93)のデザインによるオリーブの葉を啜って翼を広げた白鳩がエングレーヴィングで表されている。どちらもスウェーデンのオレフォス社の作品。

28

ガラス花瓶「四季」 4点

フィン・リンガード／デンマーク

1981年／ガラス／D14.2～14.7 H14.2～15.0

昭和56年（1981）、国賓として来日のデンマーク王国女王マルグレーテ2世陛下、王配ヘンリック殿下より

“De fire Årstider”, Four Seasons

Finn Lynggaard / Denmark

1981 / glass

gift from H.M. the Queen Margrethe II and her husband
H.R.H. the Prince Henrik of Kingdom of Denmark, to
Emperor Showa when visiting Japan as State Guests in 1981

4点それぞれ、水色、青、ピンク、紫を基調色としながら、色ガラスを何層にも重ねてデンマークの四季折々の風景を詩情豊かに表した球形の花瓶。昭和56年（1981）4月、国賓として来日されたデンマーク王国女王マルグレーテ2世陛下王配ヘンリック殿下より昭和天皇へ贈られた品である。フィン・リンガード（1930～2011）はコペンハーゲン王立美術学校絵画科および陶芸科に学び、陶芸家として国際的な評価を得たのち、1970年以降はガラス工芸作家へと転向した。個人作家による現代ガラス工芸の分野では、デンマークのみならずヨーロッパにおいても先駆的な役割を果たし、85年には自身の工房のあるエーベルトフトにガラス工芸専門の美術館を設立した。本作の制作に当たっては、同じくガラス工芸作家である夫人のチャイ・モンク（1954～）も協力したという。

29

花畑に子どもの図ガラス花瓶 1点

(制作) ハーデラン社、
(デザイン) ベンニ・モッツファイト / ノルウェー

1962年 / ガラス / D19.5 H28.5

昭和37年(1962)、来日のノルウェー王国外務大臣夫妻より

Glass vase with scene of child in a flower garden

Hadeland (production), Benny Motzfeidt (design)
/ Norway

1962 / glass

gift from Minister of Foreign Affairs of Kingdom of Norway
and his wife, to Emperor Showa when visiting Japan in 1962

無色の透明ガラスの花瓶の下半分に、沢山の花々が咲き誇る野原と、その花々の中でワンピースを着た少女が背中を向けて静かに座っている様子が、エンゲレーヴィングによって彫り表された幻想的な作品である。花瓶では反対の面となる、少女の視線の先には燦々と輝きを放つ日輪が表されており、24時間太陽が沈まない日もある白夜が続く、ノルウェーの夏の心象風景であろうか。底部に「B.M.」の彫銘があることから、ハーデラン社のデザイナーとして活動したベンニ・モッツファイト(1909～95)の作品であると推測される。昭和37年(1962)10月、政府の賓客として来日したノルウェー王国外務大臣ハルヴァルト・M・ランゲ夫妻より昭和天皇へ献上された品。

モッツファイトは、オスロ国立美術デザイン学校で絵画を学び、1955年から67年にかけてハーデラン社にデザイナーとして所属した後、70年から手仕事の復興を目指した工芸家団体プルの芸術監督を務めた。ノルウェーの現代ガラス工芸の最も重要な作家として知られている。本作品は、モッツファイトが60年代後半に独自の作風を発表するようになる前の作例とみられる。



30

白熊 1点

ハーデラン社／ノルウェー

1983年／ガラス／24.5×41.6×23.0

昭和58年(1983)、国賓として来日のノルウェー王国国王オラフ5世より

Polar bears

Hadeland / Norway

1983 / glass

gift from King Olav V of Kingdom of Norway, to Emperor Showa when visiting Japan as State Guest in 1983

ノルウェーは本土の北半分が北極圏内にあり、その一部には野生のホッキョクグマが生息する地域もある。この氷塊の上に佇むホッキョクグマの親子の置物では、ガラスの特徴である可塑性をいかして、荒々しい氷の塊と丸みを帯びた熊の姿とを異なる質感で対比的に表している。昭和58年(1983)10月、国賓として来日されたノルウェー王国国王オラフ5世より昭和天皇へ贈られた品。

ハーデラン社は1762年に設立され、当初はドイツからガラス職人を招聘して医療用のガラス製品を製産していたが、1855年からはクリスタルガラスの製産が始まり食器や花器が作られるようになった。1928年に応用美術協会に所属するスヴェレ・ベターシェンをデザイン監督に迎えると、美術的なガラス工芸の分野でも世界的に高い評価を得るようになった。



31

霰文ガラス花瓶 1点

ハーデラン社／ノルウェー

1983年

ガラス

13.5 × 21.2 × 15.5

昭和58年(1983)、三笠宮寛仁親王より

Glass vase with plain diamond cut
design

Hadeland / Norway

1983

glass

gift from Prince Mikasa Tomohito to Emperor

Showa in 1983

楕円形の口縁部を山形に、側面を日本の切子細工では霰文と呼ぶ凹凸のある菱形にカットしたハーデラン社の花瓶。昭和58年4月、ノルウェーのバイトストーレンで開催された、国際冬季スポーツ週間におけるスキー競技大会に出席された三笠宮寛仁親王より昭和天皇へ贈られた品。

32

薄紫色ガラス花瓶 1点

セヴェリン・ブロービー／ノルウェー

1987年頃

ガラス

D11.2 H22.8

昭和62年(1987)、来日のノルウェー王国皇

太子ハラルド同妃ソニア両殿下より

Light purple glass vase

Severin Brørby / Norway

c.1987 / glass

gift from H.R.H. the Crown Prince Harald and
H.R.H. the Crown Princess Sonja of Kingdom of
Norway, to Empress Kojun when visiting Japan
in 1987

薄紫色のガラスを用いて、宙吹きによって水滴形に成形された花瓶。斜めにカットされた口縁部から幾筋にも分かれたピンク色の帯が、緩やかにカーブを描きながら下方へと伸びている。作者のセヴェリン・ブロービー(1932～2001)は1956年からハーデラン社でデザイナーとして活動した後、84年に同社を退社、独立して作家活動を行った。昭和62年(1987)10月、北欧5カ国が企画した「スカンディナヴィア・トゥデイ展」の関係行事出席のため来日された、ノルウェー王国皇太子ハラルド(現国王ハラルド5世陛下)、同妃ソニア両殿下より香淳皇后へ贈られた品。

34

ガラス花器「花」 1組(4点)

(制作) イッタラ社、(デザイン) アルヴァー・アールト/フィンランド

1985年(制作)、1938年(デザイン)

ガラス

総33.6 × 34.8 × 16.2

昭和62年(1987)、内閣総理大臣より

Glass Flower-set

Iittala (production), Alvar Aalto (design)
/ Finland

1985 (production), 1938 (design)

glass

gift from the Prime Minister of Japan, to
Emperor Showa in 1987

35

ガラス鉢「小さな湖」 1点

(制作) イッタラ社、(デザイン) タピオ・ヴィルカラ／フィンランド

1985年(制作)、1966年(デザイン)

ガラス

26.8 × 27.3 × 9.8

昭和62年(1987)、内閣総理大臣より

Glass bowl, "Lompolo", pond
along the riverIittala (production), Tapio Wirkkala (design)
/ Finland

1985 (production), 1966 (design)

glass

gift from the Prime Minister of Japan, to Princess
Chichibu Setsuko in 1987

フィンランドを代表するガラス・メーカーであるイッタラ社(1881年設立)の作品の特徴は、発表時期の新旧に関わらず日常生活で組み合わせて使用することができるように、機能的かつ美的要素をもつ普遍的なデザインがなされている点である。作品番号34の4点の器を重ねた花器も、一つ一つが器としての機能を持ち、個別に使用することも可能である。フィンランドの代名詞である森と湖をイメージさせる、この器をデザインしたアルヴァー・アールト(1898～1976)は著名な建築家であるが、アールトは建築と工芸を分けず、都市計画から日用品のデザインまで全てを一貫するものとして考え、デザインの簡素化と規格化、そして美しさの問題を総合的に追究した。作品番号35をデザインしたタピオ・ヴィルカラ(1915～85)は、工業デザイナーや彫刻家としても知られる多彩な才能を持ち、ラップランド地方の小さな湖を表現した本作品のデザインも、自然の要素を巧みに取り入れる作者ならではのものである。どちらの作品も、昭和62年(1987)1月、中曽根康弘総理大臣がわが国の首相として初めてフィンランドを含む北欧東欧4カ国(他にドイツ民主共和国、ユーゴスラヴィア、ポーランド)を公式訪問した際、記念の品として昭和天皇(作品番号34)、秩父宮勢津子妃(作品番号35)へ献上したものである。

33

縞文ガラス花瓶 1点

(制作) スータヤルヴィ社、(デザイン) オイ
ヴァ・トイッカ／フィンランド

1980年代／ガラス／D18.0 H23.5

昭和61年(1986)、国賓として来日のフィン
ランド共和国大統領夫妻より

Glass vase with white and yellow
stripes

Nuutajärvi (production), Oiva Toikka (design)
/ Finland

1980's / glass

gift from President of Republic of Finland and
his wife, to Empress Kojun when visiting Japan as
State Guests in 1986

無色の透明ガラスに白色のガラスを螺旋状に融着させて宙吹きで成形し、さらにその上から黄色のガラスを水平に融着させた、色味の異なる縞模様のある花瓶。精緻なエングレーヴィング技術や洗練されたデザインでイメージされる北欧ガラスとは一風異なる、素朴な印象を与える作品であるが熟練した手仕事のもつ独特な味わいがあり、わが国の伝統工芸に近い親しみを感じさせる。1793年に設立したフィンランド最古の歴史を持つガラス工場、スータヤルヴィ社の作品で、デザインをオイヴァ・トイッカ(1931～)が担当した。昭和61年(1986)10月、国賓として来日したフィンランド共和国大統領マウノ・ヘンリック・コイヴィスト夫妻より香淳皇后へ贈られた。

スータヤルヴィ社は1950年にアラビア製陶所と同じグループ傘下になり、アラビアから加わったカイ・フランクの革新的なデザインによって、簡素でありながら美しく使いやすい作品を制作することに成功した。トイッカはヘルシンキ工芸学院陶芸科で学び、アラビアやマリメッコのデザイナーを経て、63年からスータヤルヴィでカイ・フランクとともに実験的な試みを行い、同社を代表するデザイナーとなった。

38

銀製鉢・銀製水差 2点

(制作) ジョージ・ジェンセン社、(デザイン) シグヴァルド・ベルナドッテ / デンマーク

1971年頃 / 銀・鍛造

鉢：D25.5 H8.5 / 水差：13.6 × 10.8 × 15.0

昭和46年(1971)、昭和天皇 香淳皇后の御訪欧の折、デンマーク王国国王フレデリック9世、王妃イングリットより

Silver bowl and pitcher

Georg Jensen (production), Sigvard Bernadotte (design)
/ Denmark

c.1971 / hammered silver

gift from King Frederick IX and Queen Ingrid of Kingdom of Denmark, when Emperor Showa and Empress Kojun visited Europe in 1971

器形の立ち上がりに沿って縦方向に均等に付けられた筋目により、面の曲線が強調された、優美な形の銀製の鉢と水差のセットの作品。コペンハーゲンに1904年に創業し、今日では世界各地に支店を持つジョージ・ジェンセン社の製品である。水差は1938年にデザインされ、その形が果物に似ていることから「メロン・ピッチャー」とも呼ばれる。鉢は1943年のデザインで、鉢にイチゴを盛り、水差にミルクを入れる「ストロベリーセット」の用途をイメージしてデザインされたという。機能的で洗練された形のカトラリー、銀食器を数多く生み出したインダストリアル・デザイナーとして知られるシグヴァルド・ベルナドッテ(1907～2002)のデザインによる。シグヴァルドはスウェーデン王国国王グスタフ6世アドルフの第二王子として生まれ、1930年よりジョージ・ジェンセン社のデザインを手がけている。本作は、昭和46年(1971)に昭和天皇・香淳皇后がデンマークを訪問された折、国王フレデリック9世・イングリッド王妃よりフレデンスボー離宮にて贈られた品である。なお、デザイナーのシグヴァルドはイングリッド王妃の兄に当たられる。

37

銀製盆 1点

(制作) F. ヒンゲルベア社、
(デザイン) スヴェン・ヴァイラウフ/
デンマーク

1963年頃 / 銀・鍛造 / D41.0 H2.0

昭和38年(1963)、デンマーク王国国王フレ
デリック9世、王妃イングリットより

Silver tray

F.Hingelberg (production),
Svend Weihrauch (design) / Denmark

c.1963
hammered silver

gift from King Frederick IX and Queen Ingrid of
Kingdom of Denmark, to Emperor Showa and
Empress Kojun in 1963

デンマークのオーフスに本拠地のあるF.ヒンゲルベア社は、1897年の創業で、スピニング(ヘラ
絞り)を得意とし、滑らかな曲面をもつ銀製の食器を制作した貴金属商である。この銀製の盆にもそ
の技が見て取れる。刻印の製造番号から、F.ヒンゲルベア社において1928年から56年まで活躍し
たスヴェン・ヴァイラウフ(1899～1962)のデザインと考えられる。ヴァイラウフは同社の唯一のデ
ザイナーとして、シンプルで優美な形の湯沸かしや水差しなどの銀器のデザインを数多く手がけた。
昭和38年(1963)12月、デンマーク王国マルグレーテ王女(現女王マルグレーテ2世陛下)がご旅行の途
次、日本にお立ち寄りになり、国王フレデリック9世・イングリッド王妃からの品として昭和天皇・
香淳皇后へ贈られたものである。盆の中央には、国王王妃を示す王冠とイニシャルが刻まれている。



36

銀製燭台 1対

A. ミケルセン社 / デンマーク

1920年代
銀・鍛造
各D13.7 H22.0

昭和39年(1964)、来日のデンマーク王国外
務大臣夫妻より

Pair of silver candle sticks

A. Michelsen / Denmark

1920's
hammered silver

gift from Minister of Foreign Affairs of Kingdom
of Denmark and his wife, to Emperor Showa
when visiting Japan in 1964

一本立ての銀製の燭台。ドーム形の基台から六角に面取りされたステム(脚部)にかけて、らせん
状にねじった造形がなされ、基台やステムの部分にはロココ風の植物文が配されている。18世紀の
デンマーク銀器の様式に倣って、1920年代に作られた作品と考えられる。A.ミケルセン社は、アン
トン・ミケルセンによってコペンハーゲンに1841年に創業し、1880年にはデンマーク王室の御用を
務めた宝石商で、19～20世紀半ばまで同国の銀器制作の中心にあった。昭和39年(1964)1月、日
本政府の招待により来日中のデンマーク王国外務大臣ベア・ヘラカップ夫妻から昭和天皇・香淳皇
后に贈られた品である。



40

銀製鍍金蓋付深鉢 1点

C.F. カールマン社 / スウェーデン

1928年 / 銀・鍛造、鍍金

総30.5 × 35.5 × 35.5

昭和3年(1928)、即位の礼の折、在日スウェーデン人会より

Deep gilt silver tureen with lid on stand

C. F. Carlman / Sweden

1928 / hammered silver, gilding

gift from Swedish residents in Japan, on the occasion of the
Ceremony of Enthronement of Emperor Showa in 1928

チュリーンと呼ばれる、スープなどを入れる蓋付の銀製の深鉢。大きな受け皿を伴い、表面は鍍金されて金色に輝く。蓋のつまみにチョウセンアザミ(アーティーチョーク)の蕾をつけ、両脇に幼児の形を飾る。身には両脇に持ち手が付き、綬帯が飾られ、その中央に銀円の中に逆三角形に置かれた三つの王冠のマーク、スウェーデン王国を示す略章が嵌め込まれている。刻印により、スウェーデン王室の御用も務めた宝石商、C.F.カールマン社による、1928年製の作品であることが知られる。実用というよりも装飾性の高いもので、19～20世紀初頭のヨーロッパのテーブルウェアの姿をよく伝えている。昭和3年(1928)、即位の礼に際して在日スウェーデン人会より献上された品である。



39
銀製盃 1点

C.G. ホルベリ社 / スウェーデン
1894年 / 銀・鍛造 / D8.0 H10.2
昭和40年(1965)、来日のスウェーデン日本
協会会長より

Silver cup

C. G. Hallberg / Sweden
1894 / hammered silver
gift from President of Sweden-Japan Society, to
Princess Chichibu Setsuko when visiting Japan
in 1965

口縁の部分が端反りになった細型の銀製の盃で、縁の部分に連続模様が彫刻されている。木製の台がともなう。底裏の刻印から、スウェーデン王室の御用も務めた貴金属および宝石商であったC.G.ホルベリ社による、1894年製の作品であることが知られる。ホルベリ社は20世紀初頭には北欧のなかでも最もよく知られた宝石商であった。昭和40年4月にスウェーデン日本協会のステン・アンカルクロナ会長が来日の折、秩父宮勢津子妃に贈られた品である。

41
銀製鉢 1点

ビルイェル・ホグラン / スウェーデン
1964年
銀・鍛造
D26.7 H11.8
昭和39年(1964)、来日のヨーロッパ放送連
盟会長・スウェーデン放送協会会長より

Silver bowl

Birger Haglund / Sweden
1964 / hammered silver
gift from President of European Broadcasting
Union, and President of Swedish Broadcasting
Corporation, to Emperor Showa when visiting
Japan in 1964

鍛造により丹念に形作られた銀製のボールで、椀形の深い器の見込み中央には、裏面から底を打ち出し、小さな突起が形作られている。昭和39年(1964)4月に第2回世界ラジオ・テレビジョン学校放送会議のため来日したヨーロッパ放送連盟会長オロフ・ルウドベックより昭和天皇・香淳皇后へ贈られた品である。

作者のビルイェル・ホグラン(1918～2006)はスウェーデンの20世紀後半を代表する金工家である。1934年から伝統的な金工技術を学んだ後、1944年にストックホルムに工房を開いた。国内の30余りの教会のために、祭壇で用いる銀器を制作したことも知られる。また、1970～80年代にかけては、アフガニスタンやカリブ海のボネール島、スリランカなど世界各地で活動したことで、その作風は広がりを見せ、金属と樹脂やガラスなど他の素材を組み合わせた作品を発表している。

42

銀製鳥文盆 1点

(制作) J. A. タルキアイネン社、
(デザイン) ペッカ・ピエカネン／フィンランド

1985年
銀・鍛造
D39.0 H2.7

昭和61年(1986)、国賓として来日のフィンランド共和国大統領夫妻より

Silver tray with bird design

J.A.Tarkiainen (production),
Pekka Piekäinen (design) / Finland

1985 / hammered silver

gift from President of Republic of Finland and his
wife, to Emperor Showa when visiting Japan as State
Guests in 1986

鍛造により細やかな鋸目を残して仕上げられた銀製盆である。中央には舞い飛ぶ水鳥のような文様が打ち出しにより刻まれている。端正な形ながらも、銀の素材感を強く印象づける作品で、デザインはペッカ・ピエカネン(1945～2004)による。ピエカネンは、銀器制作のアウラ社のデザイナーとして1960年代の末から銀製ジュエリーや時計のデザインを手がけた。77年から同社が工業的な製品から手作りの独自性の高い製品へ転換したのを機にピエカネンのデザインも進展をみせ、1979年にはフィンランドの産業デザイン賞を受賞している。また同年からヘルシンキの貴金属店J.A.タルキアイネン社との共同制作により、鉢や花瓶、ゴブレットなど、贈進用の高級銀器をデザインした。本作はこのJ.A.タルキアイネン社の製品である。昭和61年(1986)10月に国賓として来日のフィンランド共和国大統領マウノ・ヘンリック・コイヴィスト夫妻より昭和天皇に贈られた品。

43

銀製青色七宝飾皿 1点

(制作) J.トストルップ社、
(デザイン) グレーテ・プリッツ・
キッテルセン／ノルウェー

1957年頃

銀・エナメル

D30.0 H3.8

昭和32年(1957)、ノルウェー王国
国王ホーコン7世より

 Silver dish decorated with
blue enamel

J.Tostrup (production), Grete Prytz
Kittelsen (design) / Norway

c.1957

silver, enamel

gift from King Haakon VII of Kingdom
of Norway, to Emperor Showa in 1957

作品番号43から45までの3点はいずれもノルウェーの銀製の飾皿である。シンプルな器形で、それぞれの見込みに穏やかな地紋を彫刻して、その上に透明度の高い色彩の美しいエナメルを掛け、エナメルを透かして地紋を見せている。銀製品に色彩豊かなエナメルを巧みに用いる手法は、1880年代にJ.トストルップ社が創始し、間もなくダヴィッド・アンデルセン社もエナメルを用いた製品を手がけて1900年頃にはヨーロッパで高い評価を受けた。その後、この手法は本作のようなスカンディナヴィアン・モダンと呼ばれる革新的なデザインの製品へと引き継がれる。1950～60年代、北歐諸国の中でもノルウェーは銀製品デザインに進取を見せ、エナメルを用いた銀製品は今日もなおノルウェーを代表する工芸品となっている。作品番号43は、J.トストルップ社の一族であり、そのデザイナーを務めたグレーテ・プリッツ・キッテルセン(1917～2010)のデザインによるものであろう。昭和32年(1957)にスカンディナヴィア航空会社の北極圏経由記念飛行に参加して来日したノルウェー王国外務大臣ハルヴァルド・M・ランゲを通じて、国王ホーコン7世より昭和天皇に贈られた品である。また、作品番号44は、1929～79年までダヴィッド・アンデルセン社にデザイナーとして所属したハリー・ソービー(1905～88)による。昭和37年に政府の賓客として再来日したノルウェー王国外務大臣ハルヴァルド・M・ランゲ夫妻からの品である。作品番号45は昭和53年1月にノルウェー王国大使館新築落成式に出席のため来日されたハラルド皇太子(現国王ハラルド5世陛下)より昭和天皇・香淳皇后へ贈られた品である。

44

銀製緑色七宝飾皿 1点

(制作) ダヴィッド・アンデルセン社、
(デザイン) ハリー・ソービー／ノルウェー

1962年頃

銀・エナメル

D36.0 H5.5

昭和37年(1962)、来日のノルウェー王国外
務大臣夫妻よりSilver dish decorated with green
enamelDavid-Andersen (production),
Harry Sorby (design) / Norway

c.1962

silver, enamel

gift from Minister of Foreign Affairs of Kingdom
of Norway and his wife, to Emperor Showa when
visiting Japan in 1962

45

銀製白色七宝飾皿 1点

ダヴィッド・アンデルセン社／ノルウェー

1978年

銀・エナメル

D27.3 H4.5

昭和53年(1978)、来日のノルウェー王国皇
太子ハラルド同妃ソニヤ両殿下よりSilver dish decorated with white
enamel

David-Andersen / Norway

1978

silver, enamel

gift from H.R.H. the Crown Prince Harald
and H.R.H. the Princess Sonja of Kingdom of
Norway, to Emperor Showa when visiting Japan
in 1978

46

敷物「カササギの樹」 1点

(制作) ノルディスカ・コンパニエ社、(デザイン) ウーラ・シューマツヒェル=ペルシィ / スウェーデン

1964年頃

ウール・麻

181.0 × 155.0

昭和39年(1964)、来日のスウェーデン王国外務大臣夫妻より

Rug, "SKATORNAS TRÄD", Magpie's Tree

Nordiska Kompaniet (production),

Ulla Schumacher-Percy (design) / Sweden

c.1964 / wool, hemp

gift from Minister of Foreign Affairs of Kingdom of Sweden and his wife, to Empress Kojun when visiting Japan in 1964

豊かな自然に恵まれた北欧の品々には、身近に見られる自然の情景をデザインしたものが少なくない。本作は、白と黒の羽を持つカササギの群れが大樹に留まっている様子とその色彩を抽象的に表した敷物である。麻糸に太めの毛糸をギョルデス・ノット(トルコ結び)で編み込んだパイル地の毛足の長い敷物で、スウェーデンではリヤ織(rya)と呼ばれる伝統的な技法による。ノルディスカ・コンパニエは、1902年にストックホルムに開店した百貨店である。20世紀を通じて優れたデザインの日用品を生み出したことでも知られ、特に1937年～71年まで自社テキスタイル部門を持ち、数多くのデザイナーを招聘してラグやカーペット、様々な生地を世に送り出した。本作は、スウェーデンのテキスタイル作家として著名なウーラ・シューマツヒェル=ペルシィ(1918～2007)のデザインによるもので、実際の制作も彼女が手がけていると考えられる。ペルシィは、1949年にストックホルムに工房を持ち活動を始め、カーペット、タペストリーなどを発表し、60年代には高い評価を受けるようになった。本作は昭和39年(1964)2月に日本政府の招待により来日中のスウェーデン王国外務大臣トシュテン・ニルソン夫妻より香淳皇后に贈られた品である。

旧秩父宮家とスウェーデンの国際親善

当館収蔵品によって北欧工芸を特集した本展出品作には、旧秩父宮家の所蔵品であったものが比較的多い(陶磁10点、ガラス6点、金工1点)。それらの中では、デンマーク王国王族アクセル殿下の贈進品であるロイヤル・コペンハーゲンを除くと、ほとんどがスウェーデンの作品である点に特色があるが、それは秩父宮家とスウェーデン(瑞典)国との深いご親交によるものである。ここでは、皇室外交の一翼を担われたその様子を紹介しておきたい。

日瑞協会

秩父宮家は、大正11年(1922)6月25日に成年式を迎えられた大正天皇第二皇男子の雍仁親王に、「秩父宮」の宮号が宣下され創立した宮家である。同14年5月に海外ご留学のため御渡欧になり、昭和2年(1927)1月に帰国されるまで英国を中心に現地で見聞を広められた。登山やスキー等に親しまれ「スポーツの宮様」として知られる殿下は、この滞在中の15年3月8日に南仏ニースで開催されたテニス・トーナメントで、テニス愛好者であったスウェーデン国王グスタフ5世と対戦されている(写真1)。帰国後も、日本暹羅(タイ)協会や日英協会の総裁にご就任、昭和天皇へガーター勲章贈進のため昭和4



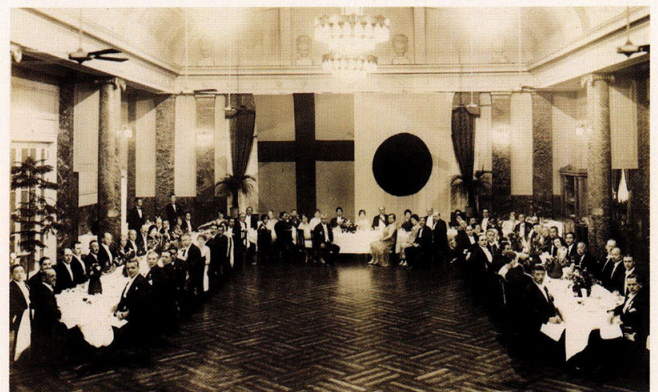
(写真1) テニスの試合をされた秩父宮雍仁親王とスウェーデン国王グスタフ5世(於ニース、1926年)

年に来日した英国グロスター公の御接伴役を務められるなど、海外経験の豊かな雍仁親王は昭和初期における皇室の国際親善に重要な務めを果たされた。それらのご公務の一つとして、次に述べる日瑞協会の総裁に就任されることとなった。

大正8年(1919)3月、スウェーデンと日本の国際親善を進展させる

ため、スウェーデン日本協会がストックホルムで創立された(当時の日本の外交関係資料では「日瑞協会」と表記されている)。創立に際して貿易業や銀行業など有力な商工関係者、将校、学者など50名が会員となり、駐スウェーデン公使であった日置益が名誉会長を務め、総裁にはグスタフ・アドルフ皇太子

が就任された。創立の背景には、第一次世界大戦への参戦のため交戦国が行ったプロパガンダによって低下していた対日感情を改善し、日瑞間の貿易拡大をもくろむ日本政府の狙いもあった。また同年10月、侯爵大隈重信を会長として、日本でもその姉妹組織となる日瑞協会が作られ、学術文化交流、貿易の発展により両国民の親交が図られることとなった(『讀賣新聞』大正8年9月30日)。その後、詳細は不明ながら日本側の協会は一度解散したとみられ、昭和4年6月に再び、駐日スウェーデン公使ハルトンを会長、前駐スウェーデン公使畑良太郎を会長として、日瑞協会の発会式が催された(『讀賣新聞』昭和4年6月22日)。そして、翌5年1月18日には、東京丸の内の日本工業倶楽部で雍仁親王の日瑞協会総裁奉載式が挙行されることとなる(写真2)。一方、スウェーデン国内の日瑞協会の活動としては、有識者による日本に関する講演会や新聞雑誌への寄稿など、日本文化の紹介が積極的に行われていたようである。そのなかで確認できる注目すべき活動としては、6年11月に協会の主催によってストックホルムで開かれた「日本美術展覧会」が挙げられる。この展覧会は、グスタフ・アドルフ皇太子と雍仁親王を名誉総裁として、スウェーデン国内の博物館のほか、王室や個人が所蔵する、約700点の日本の美術工芸品が一堂に展示される貴重な機会となった。



(写真2) 日瑞協会総裁奉載式後の晩餐会の様子(於日本工業倶楽部、昭和5年1月18日)

雍仁親王と勢津子妃は、昭和12年に英国国王ジョージ6世の戴冠式に昭和天皇の御名代として参列された際、スウェーデンとノルウェーを各国王室のご招待により訪問される予定であった。ところが、英国滞在中に両殿下は流行性感冒に罹り、特に妃殿下は重症であったため、このご旅行はやむなく中止となっている。また、結核のため御殿場御別邸で療養生

活を送られていた雍仁親王のもとを、終戦後の21年2月10日には早くも代理公使エリック・フォン・シドウ夫妻が御別邸を訪問しており、このことから宮家とスウェーデンの絆の深さが認められる。また、26年11月14日には、カール・グスタフ・ラーガフェルト公使夫妻が御別邸を訪問、陶芸家の加藤土師萌によって邸内の敷地に築窯された三峰窯の窯出し（焼き上がったものを窯から出すこと）に立ち会っている（写真3）。本展の出品作品にはラーガフェルト氏ゆかりのものが2点あるが（作品番号15、21）、同氏は結核で薨去された雍仁親王を記



（写真3）御殿場御別邸の三峰窯で窯出しされた御自作を披露される両殿下と駐日スウェーデン公使ラーガフェルト夫妻（昭和26年11月14日、左は陶芸家の加藤土師萌）。

念して、結核研究のためスウェーデンへ留学する医学生に対する奨学基金の創設に尽力するなど、宮家と親交の篤い人物であった。28年の殿下の薨去後は、勢津子妃が引き続き日瑞協会の名誉総裁を務められ、37年8月には初めてスウェーデンを訪問された。妃殿下は、グスタフ6世アドルフ国王のご招待でヘルシンボリのソフィエル離宮を訪れ、昭和天皇より同国王へお贈りになった菊花大綬章頸飾を捧呈された。この折、国王から妃殿下へ《熱帯魚文ガラス花瓶》（作品番号20）が贈られた。そのほか、このご訪瑞では前述のラーガフェルト元公使、スウェーデン日本協会会長のステン・アンカルクローナや同協会の会員ともお会いになっている（アンカルクローナ会長は40年来日した折、妃殿下に《銀製盃》（作品番号39）を献上した）。

藤原銀次郎と瑞暉亭

秩父宮家とスウェーデンの国際親善についてふれる際、紹介すべき人物とエピソードがある。その人物とは、王子製紙の会長や商工大臣、国務大臣などを歴任したことで知られる藤原銀次郎（1869～1960）である。藤原氏は昭和4年の日瑞協会の発会時より副会長になり、その後も引き続き会長に就任しており、日瑞交流の橋渡し役を担っていた。紙の原料とな

る豊かな森林をもつスカンディナヴィア半島のなかでも、スウェーデンは製紙業や森林科学の発達した国であり、藤原氏とスウェーデンの関わりも製紙が機縁であったとみられる。

数寄者としても知られる藤原氏は、日本の茶道を紹介するためスウェーデンに茶室を建設することを希望していた、ストックホルム民族学博物館館長の依頼を受けて茶室を寄贈することとなった。これはもともと、日本に長年滞在して茶道と華道を学び、帰国後に日本文化の紹介を行っていたスウェーデン人女性イーダ・トローツィの発案によるものであった。当初の依頼はあまり高価でなく新築でなくても構わないとのことであったが、藤原氏は北欧の厳しい気候にも耐える純日本式の本格的な茶室を寄贈することを決意し、茶室の切妻屋根の下には日瑞協会総裁の雍仁親王が命名された「瑞暉亭」の扁額を掲げた（写真4）。瑞暉亭は、まず東京三田の慶應義塾大学構内で仮組が行われ、昭和10年3月20日に茶器や調度を配置して日瑞協会関係者に披露された。当日は、両殿下も藤原氏のご案内で完成した茶室をご覧になった（写真5～7）。このお披露日後、翌4月8日には分解された茶室の材料、道具類、庭の草木すべてがスウェーデンの貨物船に積み込まれ、渡航する大工の棟梁とともにストックホルムへと運ばれた。

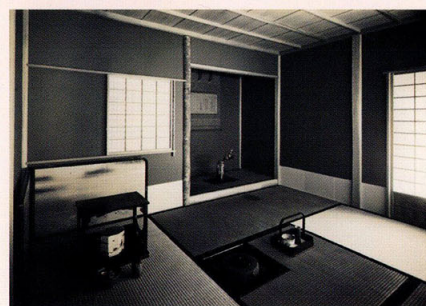
茶室はストックホルム民俗学博物館の敷地に建てられるこ



（写真4）瑞暉亭の扁額（藤原銀次郎揮毫）



（写真5）瑞暉亭外観



（写真6）瑞暉亭の茶室



(写真7) 瑞暉亭のお披露目における集合写真(昭和10年3月20日、着座された雍仁親王の左隣に立つのが藤原銀次郎)

ととなった。しかし、最初は日本人棟梁とスウェーデン人の大工との間で意見が合わず、日本の伝統建築の工法に対する理解を得るまで作業は難航した。しかし、それらの障壁を乗り越えて、瑞暉亭は無事にスウェーデンの地で完成、落成式にはグスタフ・アドルフ皇太子が来場された。この落成式の折に配布されたと思われる、瑞暉亭建設の経緯や茶会の説明を記した英文の小冊子『ZUI-KI-TEI THE COTTAGE OF AUSPICIOUS LIGHT』が藤原氏によって作成された(国立国会図書館蔵)。同書では、スウェーデンの人々に説明するため、瑞暉亭の意味が次のように述べられている。「good omen(良い前兆)」を意味する「瑞(zui)」はスウェーデンを表し、「to shine brilliantly(煌々と照らすこと)」を意味する「暉(ki)」は「the Land of the Rising Sun(太陽が昇る国)」を示す。「Cottage of Auspicious Light(吉兆の光のコテージ)」とは詩的な名前かもしれないが、命名された雍仁親王の日瑞間の親善と友好を願う想いから生まれたものであると。

藤原氏は瑞暉亭寄贈から4年後の昭和14年にスウェーデンを訪問し、茶室の庭を日本式に改造した。この折に国王と皇太子に拝謁、茶室の寄贈に対する謝意と日瑞交流尽力への労いのお言葉が伝えられた。瑞暉亭は北欧における初めての本格的日本建築であり、アルヴァー・アールトやグンナール・アスプルンドら北欧を代表する現代建築家にも影響を与えたとされている。残念ながら、1969年の火災によって焼失したが、1990年に中村昌生氏の設計により二代目の瑞暉亭が再建され、日瑞親睦のシンボルとなっている。

さて、当館収蔵品には、雍仁親王と藤原氏の交流を示す作品がある。一点は、御殿場御別邸の三峰窯における殿下御自作の茶碗で、藤原氏に贈られたものである(参考作品1)。妃殿下による御銘「瑞光」の箱書きがあり、瑞暉亭建設に尽力した同氏に因んで命銘されたものであろう。氏の没後、この茶碗は遺族より宮家へ返還された。殿下の御遺作図録『玉葉流芳』

に、三峰窯で殿下の作陶指導に当たった加藤土師萌が『茶碗銘 瑞光』にまつわるエピソードを紹介している。

藤原銀次郎氏愛蔵の銘「瑞光」の茶盃は同じく三回目の窯即ち最後の窯の御作品で、曾て同氏が御別邸に赴かれた際、茶人としての同氏だけに殿下がひそかにこの一盃を見せられたところ、同氏が茶盃は使い込まねばよくならないから預つて使い込むといい持ち帰られ遂に同氏の有に帰したものである。爾来同氏は朝な夕な、愛児を育成する気持ちで愛用されたといわれ、藤原家一番の御宝もののだといつており、殿下の御自作中以上の三点だけが宮家を離れたが、その他のものは全部妃殿下の御手もとにあるわけである。

もう一点は竹製の蓋置で、殿下が御殿場御別邸で作られた三角形の方竹を、藤原氏が茶道具の蓋置に仕立てることを考案し、宮家へ献上したものである(参考作品2)。いずれも茶人であった氏を彷彿とさせる品々であると言えよう。



参考作品1
茶碗 銘 瑞光 秩父宮雍仁親王 1点
昭和27年(1952)／陶磁／D11.5 H7.3
Tea bowl, "Zui-Ko", Auspicious Light Prince Chichibu
Yasuhito 1952 ceramic



参考作品2
竹製蓋置 秩父宮雍仁親王・藤原銀次郎 2点
昭和期(20世紀)／竹／大：D6.8 H4.5 小：D6.0 H4.4
Bamboo tea kettle lid rests Prince Chichibu Yasuhito and
Fujiwara Ginjiro Showa era, 20 c. bamboo

(主要参考文献)

- ・『雍仁親王実紀』、吉川弘文館、昭和47年
- ・秩父宮御遺作図録『玉葉流芳』、秩父宮御遺作図録刊行会、昭和29年
- ・藤原銀次郎『忙閑三年』、東洋経済新報社出版部、昭和17年
- ・藤原銀次郎『私の経験と考へ方』、高風館、昭和30年
- ・川島洋一「茶室『瑞暉亭』建設の経緯」『福井工業大学研究紀要』第37号、平成19年

※写真1～7は、いずれも三の丸尚蔵館所蔵の写真である。

参考作品3

カイフランク氏の部屋

1点

加藤土師萌

1957年

紙・インク

23.7 × 31.5

Kaj Franck's room at Nuutajärvi

Kato Hajime

1957

ink on paper

このスケッチは、陶芸家・加藤土師萌（1900～68）がフィンランドのヌータヤルヴィ社を訪れた際、同社のガラス・デザイナーをしていたカイ・フランクのオフィスを描いたものである。本紙の右下隅には、「NUUTAJÄRVI硝子工場内のカイフランク氏の部屋 2.7.57」と記されている。この当時、加藤は東京藝術大学教授を務めており、昭和32年（1957）2月にアメリカ国務省の招聘を受けて、約4か月間にわたってアメリカに滞在した。その後、デンマーク、スウェーデン、フィンランドを含むヨーロッパ、中東、アジアを訪問、同年10月に帰国した。一方、カイ・フランクはこの前年にアメリカ講演旅行の帰路に日本を私的訪問しており、33年には日本側からの正式な招請を受けて再来日し、各地で講演やワークショップを開催して多くの工芸作家に影響を与えることとなった。

なお、加藤土師萌の子息である加藤達美（1929～2003）は、31年に海外貿易振興会（現JETRO）派遣の産業意匠研究員としてデンマーク国立美術工芸学校に留学、33年にはフィンランドのアラビア製陶所で個展を開催しており、カイ・フランクとも交流もっていた。1950年代に一世を風靡した北欧モダン・デザインの現場を実体験し、わが国に北欧の現代工芸を紹介する橋渡しの役目を担った。

本作は、昭和47年に竣工した秩父宮邸新築のお祝いとして、同年9月に当時の宮内庁長官・宇佐美毅から秩父宮勢津子妃に献上された。スケッチの制作と献上の時期にずれがあるが、加藤土師萌が宮家の御殿場御別邸にある三峰窯の陶芸指導にも当たっていることから、ゆかりのある品としてあえて選ばれたのではないかと推測される。

(参考) 北欧関連地図

左列の国名の下に首都を■、主要な都市及び本展出品作品に関連する地名を○で示し、また主な本展出品作品に関連する都市とその製作者、作品番号を記した。

デンマーク



- コペンハーゲン / Copenhagen
 - ロイヤル・コペンハーゲン社 (No.1~10, 12~14)
 - ビング・オー・グレンダール社 (No.11)
 - ジョージ・ジェンセン社 (No.38)
- エーベルトフト / Ebeltoft
 - フィン・リンガード (No.28)
- オーフス / Århus
 - F. ヒンゲルベア社 (No.37)

スウェーデン



- ストックホルム / Stockholm
 - ロールストランド製陶所 (No.15)
 - グスタフスベリ製陶所 (No.16, 17)
 - ノルディスカ・コンパニエ社 (No.46)
- スモーランド地方 / Småland
 - オレフォス社 (No.18, 19, 26, 27)
 - コスタ社 (No.20~25)

ノルウェー



- オスロ / Oslo
 - ハーデラン社 (No.29~31)
 - J. トストルップ社 (No.43)
 - ダヴィッド・アンデルセン社 (No.44, 45)

フィンランド



- ヘルシンキ / Helsinki
 - J.A. タルキアイネン社 (No.42)
- ハメーンリンナ / Hämeenlinna
 - ヌータヤルヴィ社 (No.33)
 - イッタラ社 (No.34, 35)



(参考) 皇室と北歐五カ国のご交流～関連年表

*番号は、各事項に関連の本展出品の作品番号である。

年号	日本から北歐へ	北歐から日本へ	関連事項
慶應3年 (1867)			デンマークとの修好通商航海条約締結、国交開始
明治元年 (1868)			日本・スウェーデン＝ノルウェー修好通商航海条約締結、スウェーデンとの国交開始
明治38年 (1905)			スウェーデンとの同君連合を解消しノルウェー独立、ノルウェーとの国交開始
大正8年 (1919)			フィンランドとの国交開始
大正13年 (1924)			皇太子裕仁親王(昭和天皇)御婚儀 *18
大正15年 (1926)		9月～10月、スウェーデン国皇太子グスタフ・アドルフ同妃両殿下、国内各地ご視察 *19	
昭和3年 (1928)			即位の礼 *1、40
昭和5年 (1930)		3月、デンマーク国皇太子フレデリック殿下、皇太子弟スード殿下、皇従弟アクセル同妃両殿下の4方、お立ち寄り	
昭和8年 (1933)		6月～8月、スウェーデン国王族カール殿下	
昭和27年 (1952)		11月、デンマーク国王族アクセル殿下	ヘルシンキオリンピック、オスロ冬季オリンピック
昭和28年 (1953)	3月30日～10月12日皇太子殿下(天皇陛下)、英国女王陛下戴冠式にご名代としてご参列。アメリカ合衆国、カナダ、フランス、スペイン、モナコ、イタリア、パチカン、ベルギー、オランダ、ドイツ連邦共和国、デンマーク、ノルウェー、スウェーデン、スイス(お立ち寄り)ご旅行		
昭和31年 (1956)			アイスランドとの国交開始
昭和32年 (1957)	2月24日～3月8日崇仁親王同妃両殿下、スウェーデン、ノルウェー、デンマークを国際親善のためご訪問 *6	2月、デンマーク国王族アクセル殿下	2月、スカンディナヴィア航空、日本と北歐を結ぶ北極横断航路を開設 *43
昭和33年 (1958)		5月、デンマーク国王族アクセル殿下 *7	
昭和37年 (1962)	7月21日～8月9日雍仁親王妃勢津子殿下、英国、スウェーデンを国際親善のためご訪問(フランス、デンマークお立ち寄り) *4、8、20		
昭和38年 (1963)		12月、デンマーク国王女マルグレーテ殿下 *37	
昭和39年 (1964)		10月、ノルウェー国皇太子ハラルド殿下。11月、デンマーク国王弟クヌード同妃両殿下	東京オリンピック
昭和40年 (1965)	10月12日～12月3日正仁親王同妃両殿下、デンマーク、フランス、ベルギー、オランダ、英国、ドイツ連邦共和国、スイス、モナコ、イタリア、パチカン、タイを国際親善のためご訪問		
昭和42年 (1967)		10月、スウェーデン国王女(王孫)クリスティーナ殿下	
昭和43年 (1968)		11月、スウェーデン国王子ベティル殿下	
昭和45年 (1970)		4月、デンマーク国王女マルグレーテ殿下、同夫君ヘンリック殿下 *5。5月、スウェーデン国皇太子カール・グスタフ殿下	日本万国博覧会(於:大阪)。北歐五カ国、スカンディナヴィア館をパヴィリオン出展
昭和46年 (1971)	9月27日～10月14日天皇皇后両陛下(昭和天皇香淳皇后)ベルギー、英国、ドイツ連邦共和国を国際親善のためご訪問。(アメリカ合衆国、デンマーク、フランス、オランダ、スイスお立ち寄り) *10、14、38	5月、スウェーデン国王女(王孫)クリスティーナ殿下 *25	
昭和47年 (1972)		2月、スウェーデン国王子ベティル殿下	
昭和48年 (1973)		11月、スウェーデン国王子ベティル殿下	
昭和53年 (1978)		2月、ノルウェー国皇太子ハラルド同妃両殿下 *45	
昭和54年 (1979)		5月、スウェーデン国王族ベティル同妃両殿下	
昭和55年 (1980)		4月、スウェーデン国王カール16世グスタフ王妃両陛下、国賓として来日される *22、23	
昭和56年 (1981)	3月27日～4月16日寛仁親王同妃両殿下、カナダ、ノルウェー、英国、オーストリアご旅行	4月、デンマーク国王女マルグレーテ2世陛下、王妃ヘンリック殿下、国賓として来日される *28	
昭和57年 (1982)	2月22日～3月3日寛仁親王殿下フィンランドご旅行		
昭和58年 (1983)	4月17日～29日寛仁親王殿下ノルウェー、英国ご旅行 *31。5月1日～11日 正仁親王同妃両殿下、コペンハーゲンで開催の日本展開会式ご臨席のためデンマークご訪問、併せてスウェーデンご訪問(フランスお立ち寄り)	10月、ノルウェー国王オラフ5世陛下、国賓として来日される *30	
昭和59年 (1984)	3月23日～4月2日寛仁親王殿下ノルウェーご旅行	5月、デンマーク国王配ヘンリック殿下	

昭和60年 (1985)	6月1日～15日皇太子同妃両殿下(天皇后両陛下)、スウェーデン、デンマーク、ノルウェーをご名代としてご訪問。フィンランドの招待によりご訪問	1月、フィンランド国大統領、同令嬢。3月、スウェーデン国国王カール16世グスタフ陛下。5月、デンマーク国王妹ベネディクト殿下	
昭和61年 (1986)		10月、フィンランド国大統領夫妻、国賓として来日される *33、42	
昭和62年 (1987)		9月、アイスランド国大統領。10月、ノルウェー国皇太子ハラルド同妃両殿下 *32。11月、デンマーク国皇太子フレデリック殿下。スウェーデン国国王カール16世グスタフ陛下	9月、北欧五カ国主催「スカンディナヴィア・トゥデイ」開催。北欧文化を紹介する展覧会、行事が各地で開催される
昭和63年 (1988)	4月7日～18日寛仁親王同妃両殿下ノルウェーご旅行		
平成元年 (1989)		2月、フィンランド国大統領。アイスランド国大統領。スウェーデン国国王カール16世グスタフ王妃両陛下。ノルウェー国皇太子ハラルド殿下。デンマーク国王配ヘンリック殿下	大喪の礼
平成2年 (1990)	7月22日～28日憲仁親王殿下、フィンランドの招待により、サボンリンナ・オペラ・フェスティバルにご臨席のためご訪問	3月、スウェーデン国国王カール16世グスタフ陛下。11月、デンマーク女王マルグレーテ2世陛下、王配ヘンリック殿下。スウェーデン国国王カール16世グスタフ王妃両陛下。ノルウェー国皇太子(摂政)ハラルド同妃両殿下。アイスランド国大統領。フィンランド国大統領夫妻	即位の礼
平成3年 (1991)	1月28日～2月1日皇太子殿下、ノルウェー国王オラフ5世陛下の葬儀にご参列のためご旅行。 3月6日～14日正仁親王同妃両殿下、デンマークの招待により、日本伝統芸展開幕式、日本現代版画展開幕式にご出席のためご訪問。国際親善のためスウェーデンをご訪問(フランスお立ち寄り)	3月、スウェーデン国首相夫妻(公式実務)。4月、デンマーク国皇太后イングリッド陛下、王妹アンネ・マリー陛下。6月、デンマーク国首相夫妻(公式実務)	
平成4年 (1992)		1月、ノルウェー国首相、同夫君(公式実務)	
平成5年 (1993)		10月、スウェーデン国王姉クリスティーナ殿下、同夫君	
平成6年 (1994)	2月20日～3月1日寛仁親王同妃両殿下、ノルウェーの招待により、リレハンメル冬季オリンピックの開催に際し、国際親善のためご訪問(英国お立ち寄り)		リレハンメル冬季オリンピック
平成7年 (1995)	9月19日～30日正仁親王同妃両殿下、フィンランド、ルーマニアの招待により、国際親善のためご訪問(オーストリアお立ち寄り)	10月、デンマーク国王妹ベネディクト殿下	
平成8年 (1996)	9月9日～19日憲仁親王同妃両殿下、デンマーク、アイスランド、カナダ、アメリカ合衆国を外国事情ご視察のためご旅行	4月、アイスランド国大統領、同令嬢。10月、スウェーデン国国王カール16世グスタフ陛下	
平成9年 (1997)		4月、フィンランド国首相。5月、スウェーデン国国王カール16世グスタフ王妃両陛下。9月、フィンランド国大統領(公式実務)。10月、デンマーク国皇太子フレデリック殿下	
平成10年 (1998)	5月23日～6月5日天皇后両陛下、英国、デンマークの招待により国際親善のためご訪問(ポルトガルお立ち寄り)	2月、ノルウェー国皇太子ホーコン・マグヌス殿下。スウェーデン国国王カール16世グスタフ陛下	
平成12年 (2000)	5月20日～6月1日天皇后両陛下、オランダ、スウェーデンの招待により国際親善のためご訪問(スイス、フィンランドお立ち寄り)		
平成13年 (2001)		3月、ノルウェー国国王ハラルド5世王妃両陛下、国賓として来日される。4月、スウェーデン国国王カール16世グスタフ陛下。7月、デンマーク国王女エリーザベット殿下、同夫君。10月、スウェーデン国皇太子ヴィクトリア殿下。12月、スウェーデン国王妃シルヴィア陛下	
平成15年 (2003)	4月2日～7日寛仁親王殿下、彬子女王殿下、ノルウェーの招待により、「リッデレンネ(身体障害者クロス・カンツリー・スキー大会)40周年大会」にご臨席のためご訪問		
平成16年 (2004)	5月12日～24日皇太子殿下、デンマークの招待により、デンマーク国皇太子フレデリック殿下の結婚式典にご参列のためご訪問、ポルトガルの招待により、国際親善のためご訪問、スペインの招待により、スペイン国皇太子フェリペ殿下の結婚式典にご参列のためご訪問	10月、フィンランド国大統領、同夫君(公式実務)。11月、デンマーク国女王マルグレーテ2世陛下、王配ヘンリック殿下、国賓として来日される	
平成17年 (2005)	5月7日～14日天皇后両陛下、ノルウェーの招待により国際親善のためご訪問(アイルランドお立ち寄り)。	4月、スウェーデン国皇太子ヴィクトリア殿下。ノルウェー国皇太子ホーコン殿下。デンマーク国皇太子フレデリック同妃両陛下。7月、アイスランド国首相夫妻。12月、スウェーデン国王姉デジレ殿下及び同夫君	日本国際博覧会(愛・地球博、於：愛知)、北欧五カ国、北欧共同館をパビリオン出展
平成18年 (2006)		11月、デンマーク国首相夫妻	
平成19年 (2007)	5月21日～30日天皇后両陛下、スウェーデン及び英国から、リンネ生誕300年に当たり、リンネ協会の名誉会員である天皇陛下及び皇后陛下に対しご訪問願いたい旨の招請を受けご訪問、エストニア、ラトビア及びリトアニアの招待により、国際親善のためご訪問	3月、スウェーデン国国王カール16世グスタフ陛下及び王妃シルヴィア陛下、国賓として来日される。4月、スウェーデン国王姉クリスティーナ殿下及び同夫君。10月、スウェーデン国国王カール16世グスタフ陛下	
平成20年 (2008)		4月、スウェーデン国首相夫妻。6月、フィンランド国首相	
平成22年 (2010)	6月17日～21日皇太子殿下、スウェーデンの招待により、スウェーデン国皇太子ヴィクトリア殿下の結婚式典にご参列のためご訪問。6月30日～7月6日憲仁親王妃久子殿下、フィンランドの招待により、国際親善のためご訪問		
平成23年 (2011)		6月、デンマーク国皇太子フレデリック殿下。11月、デンマーク国王子ヨアキム同妃両殿下	
平成24年 (2012)		6月、スウェーデン国国王カール16世グスタフ陛下及び王妃シルヴィア陛下。11月、ノルウェー国首相夫妻(公式実務)	
平成25年 (2013)	6月7日～11日憲仁親王妃久子殿下、スウェーデンの招待により、スウェーデン国第2女王マデレーン殿下の結婚式典にご参列のためご訪問		

※皇族方のご留学中のご視察、非公式の訪日等については一部を省略している。

主な参考文献：『儀礼軌範』外務大臣官房儀典長室、昭和41年(1966)／『昭和天皇実録』／宮内庁ホームページ／外務省ホームページ

出品目録

出品番号	作品名	作者	員数	制作年代	技法材質	寸法 (cm)	伝来
陶磁							
1	デンマーク汽船図花瓶	(制作)ロイヤル・コペンハーゲン社、(絵付)クリスチャン・ベンジャミン・オールセン/デンマーク	1対	1928年	陶磁	各D22.0 H42.5	昭和3年(1928)、即位の礼に際して、デンマーク王国国王クリスチャン10世より
2	デンマーク帆船図花瓶	ロイヤル・コペンハーゲン社/デンマーク	1点	1923～1928年	陶磁	D12.2 H30.0	香淳皇后御遺品
3	風景絵皿	ロイヤル・コペンハーゲン社/デンマーク	1点	1923～1934年	陶磁	D25.3 H3.0	秩父宮家旧蔵品
4	人魚像絵皿	ロイヤル・コペンハーゲン社/デンマーク	1点	1961年	陶磁	D21.7 H3.6	昭和37年(1962)、秩父宮勢津子妃の御訪欧の折、デンマーク王国王族アクセルより
5	染付草花文壺	ロイヤル・コペンハーゲン社/デンマーク	1点	1970年	陶磁	D21.0 H29.2	昭和45年(1970)、来日のデンマーク王国王女マルグレーテ殿下、同夫君ヘンリック殿下より
6	クチナシ図花瓶	ロイヤル・コペンハーゲン社/デンマーク	1点	1957年	陶磁	D10.4 H22.2	昭和32年(1957)、三笠宮同妃両殿下の御訪欧の折、デンマーク王国王族アクセル妃より
7	白磁彫文鉢	ロイヤル・コペンハーゲン社/デンマーク	1点	1957年	陶磁	D26.0 H15.0	昭和33年(1958)、来日のデンマーク王国王族アクセルより
8	シャクナゲ図花瓶	ロイヤル・コペンハーゲン社/デンマーク	1点	1962年	陶磁	D19.2 H33.4	昭和37年(1962)、秩父宮勢津子妃の御訪欧の折、デンマーク王国王族アクセルより
9	フローラ・ダニカ 蓋付深鉢	ロイヤル・コペンハーゲン社/デンマーク	1点	1968年	陶磁	総D28.8 総H18.0	昭和44年(1969)、来日のデンマーク王国外務大臣夫妻より
10	フローラ・ダニカ 蓋付深鉢	ロイヤル・コペンハーゲン社/デンマーク	1点	1968～1971年	陶磁	総D33.6 総H26.4	昭和46年(1971)、昭和天皇 香淳皇后の御訪欧の折、ロイヤル・コペンハーゲン社より
11	少女とガチョウ	(制作)ビング・オー・グレンダール社、(原型)アクセル・ロッハー/デンマーク	1点	1948～1951年	陶磁	13.6×12.3×24.2	香淳皇后御遺品
12	フォルスター島の民族 衣装の婦人	(制作)ロイヤル・コペンハーゲン社、(原型)カール・マーチン・ハンセン/デンマーク	1点	1955年	陶磁	9.3×10.3×32.3	秩父宮家旧蔵品
13	大鎌を持つ収穫人	(制作)ロイヤル・コペンハーゲン社、(原型)クリスチャン・トムセン/デンマーク	1点	1960年	陶磁	12.6×13.5×25.3	秩父宮家旧蔵品
14	ブルー・フィッシュー シーラカンス	(制作)ロイヤル・コペンハーゲン社、(原型)ジャンヌ・グリュー/デンマーク	1点	1971年頃	陶磁	55.5×110.0×18.5	昭和46年(1971)、昭和天皇 香淳皇后の御訪欧の折、ロイヤル・コペンハーゲン社より
15	淡青緑釉碗	カール・ハリール・ストールハーネ(ロールストランド製陶所)/スウェーデン	1点	1950年代前半	陶磁	D11.9 H9.5	昭和30年(1955)、駐日スウェーデン王国公使より
16	飴釉櫛搔文台付鉢	(制作)グスタフスベリ製陶所、(デザイン)ヴィルヘルム・コーゲ/スウェーデン	1点	1957年	陶磁	■23.4 H20.3	昭和32年(1957)、駐日スウェーデン王国公使より
17	鉄釉方形花瓶	(制作)グスタフスベリ製陶所、(デザイン)スティグ・リンドベリ/スウェーデン	1点	1970年代後半	陶磁	11.5×38.0×46.5	昭和56年(1981)、日本スウェーデン協会より
ガラス							
18	ガラス蓋付壺 (王冠に葉文様)	(制作)オレフォス社、(デザイン)エードヴァルド・ハルド/スウェーデン	1点	1923年	ガラス	D25.0 H44.5	大正12年(1923)、翌年の皇太子裕仁親王御成婚の折、スウェーデン王国国王グスタフ5世より
19	ガラス蓋付壺 (紋章に紐飾文様)	(制作)オレフォス社、(デザイン)エードヴァルド・ハルド/スウェーデン	1点	1926年	ガラス	D21.0 H39.5	大正15年(1926)、来日のスウェーデン王国皇太子同妃より
20	熱帯魚文ガラス花瓶	(制作)コスタ社、(デザイン)ヴィッケ・リンドストランド/スウェーデン	1点	1950年代	ガラス	7.0×14.0×22.5	昭和37年(1962)、秩父宮勢津子妃の御訪欧の折、スウェーデン王国国王グスタフ6世アドルフより
21	富士山図ガラス置物	コスタ社/スウェーデン	1点	1969年	ガラス	総11.5×25.2×25.7	昭和44年(1969)、元駐日スウェーデン王国公使より
22	花卉文ガラス台付鉢	(制作)コスタ社、(デザイン)リーサ・パウアー/スウェーデン	1点	1979年	ガラス	D23.7 H29.5	昭和55年(1980)、国賓として来日のスウェーデン王国国王カール16世グスタフ王妃シルヴィア両陛下より
23	リンネソウ文ガラス台 付鉢	(制作)コスタ社、(デザイン)リーサ・パウアー/スウェーデン	1点	1979年	ガラス	D12.7 H14.5	昭和55年(1980)、国賓として来日のスウェーデン王国国王カール16世グスタフ王妃シルヴィア両陛下より
24	香水瓶	コスタ社/スウェーデン	2点	1960年代	ガラス	各D5.0 総H8.1	秩父宮家旧蔵品

25	渦巻文ガラス皿	(制作) コスタ社、 (デザイン) モナ・モラレス＝シル ト／スウェーデン	1点	1970年	ガラス	D37.0 H5.9	昭和46年(1971)、来日のスウェーデン 王国女王(王孫)クリスティーナ殿下 より
26	ボーイスカウト紋章入 ガラス花瓶	オレフォス社／スウェーデン	1点	1980年	ガラス	5.4×10.7×16.9	昭和55年(1980)、昭和天皇の御学友 より
27	国際連合紋章入ガラス 花瓶	(制作) オレフォス社、 (デザイン) オーレ・アルベリウス ／スウェーデン	1点	1982年	ガラス	10.0×22.8×23.5	昭和57年(1982)、公賓として来日の 国際連合事務総長より
28	ガラス花瓶「四季」	フィン・リンガード／デンマーク	4点	1981年	ガラス	D14.2～14.7 H14.2～15.0	昭和56年(1981)、国賓として来日の デンマーク王国女王マルグレーテ2 世陛下、王妃ヘンリック殿下より
29	花畑に子どもの囃ガラ ス花瓶	(制作) ハーデラン社、 (デザイン) ベンニ・モッツファイト ／ノルウェー	1点	1962年	ガラス	D19.5 H28.5	昭和37年(1962)、来日のノルウェー 王国外務大臣夫妻より
30	白熊	ハーデラン社／ノルウェー	1点	1983年	ガラス	24.5×41.6×23.0	昭和58年(1983)、国賓として来日の ノルウェー王国国王オラフ5世より
31	霞文ガラス花瓶	ハーデラン社／ノルウェー	1点	1983年	ガラス	13.5×21.2×15.5	昭和58年(1983)、三笠宮寛仁親王より
32	薄紫色ガラス花瓶	セヴェリン・ブロービー／ ノルウェー	1点	1987年頃	ガラス	D11.2 H22.8	昭和62年(1987)、来日のノルウェー 王国皇太子ハラルド同妃ソニア両殿 下より
33	縞文ガラス花瓶	(制作) スータヤルヴィ社、 (デザイン) オイヴァ・トイッカ／ フィンランド	1点	1980年代	ガラス	D18.0 H23.5	昭和61年(1986)、国賓として来日の フィンランド共和国大統領夫妻より
34	ガラス花器「花」	(制作) イッタラ社、 (デザイン) アルヴァー・アールト ／フィンランド	1組 (4点)	1985年(制作)、 1938年(デザイン)	ガラス	総33.6×34.8×16.2	昭和62年(1987)、内閣総理大臣より
35	ガラス鉢「小さな湖」	(制作) イッタラ社、 (デザイン) タビオ・ヴィルカラ／ フィンランド	1点	1985年(制作)、 1966年(デザイン)	ガラス	26.8×27.3×9.8	昭和62年(1987)、内閣総理大臣より

金工

36	銀製燭台	A. ミケルセン社／デンマーク	1対	1920年代	銀・鍛造	各D13.7 H22.0	昭和39年(1964)、来日のデンマーク 王国外務大臣夫妻より
37	銀製盆	(制作) F. ヒンゲルベア社、 (デザイン) スヴェン・ヴァイラウフ ／デンマーク	1点	1963年頃	銀・鍛造	D41.0 H2.0	昭和38年(1963)、デンマーク王国国 王フレデリック9世、王妃イングリッ トより
38	銀製鉢・銀製水差	(制作) ジョージ・ジェンセン社、 (デザイン) シグヴァルド・ベルナ ドッテ／デンマーク	2点	1971年頃	銀・鍛造	鉢：D25.5 H8.5 水差：13.6×10.8× 15.0	昭和46年(1971)、昭和天皇 香淳皇 后の御訪欧の折、デンマーク王国国 王フレデリック9世、王妃イングリッ トより
39	銀製盃	C.G. ホルベリ社／スウェーデン	1点	1894年	銀・鍛造	D8.0 H10.2	昭和40年(1965)、来日のスウェーデ ン日本協会会長より
40	銀製鍍金蓋付深鉢	C.F. カールマン社／スウェーデン	1点	1928年	銀・鍛造、 鍍金	総30.5×35.5×35.5	昭和3年(1928)、即位の礼の折、在 日スウェーデン人会より
41	銀製鉢	ビルイェル・ホグラン／ スウェーデン	1点	1964年	銀	D26.7 H11.8	昭和39年(1964)、来日のヨーロッパ 放送連盟会長・スウェーデン放送協 会会長より
42	銀製鳥文盆	(制作) J. A. タルキアイネン社、 (デザイン) ベッカ・ピエカネン／ フィンランド	1点	1985年	銀・鍛造	D39.0 H2.7	昭和61年(1986)、国賓として来日の フィンランド共和国大統領夫妻より
43	銀製青色七宝飾皿	(制作) J. トストルップ社、 (デザイン) グレーテ・ブリッツ・キッ テルセン／ノルウェー	1点	1957年頃	銀・エナメル	D30.0 H3.8	昭和32年(1957)、ノルウェー王国国 王ホーコン7世より
44	銀製緑色七宝飾皿	(制作) ダヴィッド・アンデルセン 社、(デザイン) ハリー・ソービー／ ノルウェー	1点	1962年頃	銀・エナメル	D36.0 H5.5	昭和37年(1962)、来日のノルウェー 王国外務大臣夫妻より
45	銀製白色七宝飾皿	ダヴィッド・アンデルセン社／ ノルウェー	1点	1978年	銀・エナメル	D27.3 H4.5	昭和53年(1978)、来日のノルウェー 王国皇太子ハラルド同妃ソニア両殿 下より

染織

46	敷物「カササギの樹」	(制作) ノルディスカ・コンパニエ 社、(デザイン) ウーラ・シューマッ ヒェル＝ベルシ／スウェーデン	1点	1964年頃	ウール・麻	181.0×155.0	昭和39年(1964)、来日のスウェーデ ン王国外務大臣夫妻より
----	------------	---	----	--------	-------	-------------	-------------------------------------

参考作品

参考1	茶碗 銘 瑞光	秩父宮雍仁親王	1点	昭和27年(1952)	陶磁	D11.5 H7.3
参考2	竹製蓋置	秩父宮雍仁親王・藤原銀次郎	2点	昭和期(20世紀)	竹	大：D6.8 H4.5 小：D6.0 H4.4
参考3	カイフランク氏の部屋	加藤土師萌	1点	1957年	紙・インク	23.7×31.5

List of Exhibits

Ceramics

1

Pair of vases with Danish steamship design
Royal Copenhagen (production), Christian Benjamin Olsen
(ceramic painting) / Denmark
1928
ceramic
each d. 22.0, h. 42.5
gift from King Christian X of Kingdom of Denmark, on the
occasion of the Ceremony of Enthronement of Emperor
Showa in 1928

2

Vase with Danish sailboat design
Royal Copenhagen / Denmark
1923-1928
ceramic
d. 12.2, h. 30.0
relic of Empress Kojun

3

Dish with scenery
Royal Copenhagen / Denmark
1923-1934
ceramic
d. 25.3, h. 3.0
formerly owned by Prince Chichibu Family

4

Dish with mermaid figure
Royal Copenhagen / Denmark
1961
ceramic
d. 21.7, h. 3.6
gift from Prince Axel of Kingdom of Denmark, when
Princess Chichibu Setsuko visited Europe in 1962

5

Bottle with flowers and grass design in underglaze
blue
Royal Copenhagen / Denmark
1970
ceramic
d. 21.0, h. 29.2
gift from H.R.H. the Princess Margrethe and her husband
H.R.H. the Prince Henrik of the Kingdom of Denmark, to
Emperor Showa when visiting Japan in 1970

6

Vase with gardenia design
Royal Copenhagen / Denmark
1957
ceramic
d. 10.4, h. 22.2
gift from Princess Margaretha of Kingdom of Denmark,
to Princess Chichibu Setsuko when T.R.H. Prince and
Princess Mikasa visited Europe in 1957

7

White porcelain bowl with carved designs
Royal Copenhagen / Denmark
1957
ceramic
d. 26.0, h. 15.0
gift from Prince Axel of Kingdom of Denmark, to Princess
Chichibu Setsuko when visiting Japan in 1958

8

Vase with rhododendron design
Royal Copenhagen / Denmark
1962
ceramic
d. 19.2, h. 33.4
gift from Prince Axel of Kingdom of Denmark, when
Princess Chichibu Setsuko visited Europe in 1962

9

Flora Danica, Oval tureen with lid on stand

Royal Copenhagen / Denmark
1968
ceramic
total d. 28.8, total h. 18.0
gift from Minister of Foreign Affairs of Kingdom of
Denmark and his wife, to Emperor Showa when visiting
Japan in 1969

10

Flora Danica, Oval tureen with lid on stand
Royal Copenhagen / Denmark
1968-1971
ceramic
total d. 33.6, total h. 26.4
gift from Royal Copenhagen when Emperor Showa and
Empress Kojun visited Europe in 1971

11

Girl and geese
Bing & Grondahl (production), Axel Locher (original
model) / Denmark
1948-1951
ceramic
13.6×12.3×24.2
relic of Empress Kojun

12

Falster from the series of Danish folk costumes
Royal Copenhagen (production), Carl Martin-Hansen
(original model) / Denmark
1955
ceramic
9.3×10.3×32.3
formerly owned by Prince Chichibu Family

13

Harvester Man with Scyth
Royal Copenhagen (production), Christian Thomsen
(original model) / Denmark
1960
ceramic
12.6×13.5×25.3
formerly owned by Prince Chichibu Family

14

Blue fish, coelacanth
Royal Copenhagen (production), Jeanne Grut (original
model) / Denmark
c. 1971
ceramic
55.5×110.0×18.5
gift from Royal Copenhagen when Emperor Showa and
Empress Kojun visited Europe in 1971

15

Bowl with light bluish green glaze
Carl-Harry Stålhane, Rörstrands / Sweden
early 1950's
ceramic
d. 11.9, h. 9.5
gift from Minister of Kingdom of Sweden to Japan, to
Princess Chichibu Setsuko in 1955

16

Bowl with comb scratched pattern, amber glaze,
with a base
Gustavsberg (production), Wilhelm Kåge (design) / Sweden
1957
ceramic
d. 23.4, h. 20.3
gift from Minister of Kingdom of Sweden to Japan, to
Princess Chichibu Setsuko in 1957

17

Square vase, iron glaze
Gustavsberg (production), Stig Lindberg (design) / Sweden
late 1970's
ceramic
11.5×38.0×46.5

gift from Japan-Sweden Society, to Princess Chichibu
Setsuko in 1981

Glass

18

Covered glass jar with crown and leaf design
Orrefors (production), Edward Hald (design) / Sweden
1923
glass
d. 25.0, h. 44.5
gift from King Gustaf V of Kingdom of Sweden, in 1923,
the year before the Imperial Wedding of Crown Prince
Hirohito (Emperor Showa)

19

Covered glass jar with crest and string ornament
design
Orrefors (production), Edward Hald (design) / Sweden
1926
glass
d. 21.0, h. 39.5
gift from Crown Prince and Princess of Kingdom of
Sweden, to Empress Teimei when visiting Japan in 1926

20

Glass vase with tropical fish design
Kosta (production), Vicke Lindstrand (design) / Sweden
1950's
glass
7.0×14.0×22.5
gift from King Gustaf VI Adolf of Kingdom of Sweden,
when Princess Chichibu Setsuko visited Europe in 1962

21

Glass ornament of Mt. Fuji
Kosta / Sweden
1969
glass
total size 11.5×25.2×25.7
gift from former Minister of Kingdom of Sweden to Japan,
to Princess Chichibu Setsuko in 1969

22

Glass bowl with flower design, with a base
Kosta (production), Lisa Bauer (design) / Sweden
1979
glass
d. 23.7, h. 29.5
gift from H.M. the King Carl XVI Gustaf and H.M. the
Queen Silvia of Kingdom of Sweden, to Emperor Showa
and Empress Kojun when visiting Japan as State Guests in
1980

23

Glass bowl with twinflower design, with a base
Kosta (production), Lisa Bauer (design) / Sweden
1979
glass
d. 12.7, h. 14.5
gift from H.M. the King Carl XVI Gustaf and H.M. the
Queen Silvia, of Kingdom of Sweden, to Princess Chichibu
Setsuko when visiting Japan as State Guests in 1980

24

Perfume bottles
Kosta / Sweden
1960's
glass
each d. 5.0, total h. 8.1
formerly owned by Prince Chichibu Family

25

Glass dish with spiral pattern
Kosta (production), Mona Morales-Schildt (design) /
Sweden
1970
glass
d. 37.0, h. 5.9

gift from H.R.H. the Princess Christina (granddaughter of the King) of Kingdom of Sweden, to Princess Chichibu Setsuko when visiting Japan in 1971

26
Glass vase with Boy Scouts crest

Orrefors / Sweden
1980
glass
5.4×10.7×16.9
gift from school friend of Emperor Showa, in 1980

27
Glass vase with the United Nations crest

Orrefors (production), Olle Alberius (design) / Sweden
1982
glass
10.0×22.8×23.5
gift from United Nations Secretary-General, to Emperor Showa when visiting Japan as Official Guest in 1982

28
“De fire Årstider”, Four Seasons

Finn Lynggaard / Denmark
1981
glass
d.14.2-14.7, h. 14.2-15.0
gift from H.M. the Queen Margrethe II and her husband H.R.H. the Prince Henrik of Kingdom of Denmark, to Emperor Showa when visiting Japan as State Guests in 1981

29
Glass vase with scene of child in a flower garden

Hadeland (production), Benny Motzfeidt (design) / Norway
1962
glass
d. 19.5, h. 28.5
gift from Minister of Foreign Affairs of Kingdom of Norway and his wife, to Emperor Showa when visiting Japan in 1962

30
Polar bears

Hadeland / Norway
1983
glass
24.5×41.6×23.0
gift from King Olav V of Kingdom of Norway, to Emperor Showa when visiting Japan as State Guest in 1983

31
Glass vase with plain diamond cut design

Hadeland / Norway
1983
glass
13.5×21.2×15.5
gift from Prince Mikasa Tomohito to Emperor Showa in 1983

32
Light purple glass vase

Severin Brørby / Norway
c.1987
glass
d.11.2, h. 22.8
gift from H.R.H. the Crown Prince Harald and H.R.H. the Crown Princess Sonja of Kingdom of Norway, to Empress Kojun when visiting Japan in 1987

33
Glass vase with white and yellow stripes

Nuutajärvi (production), Oiva Toikka (design) / Finland
1980's
glass
d. 18.0, h. 23.5
gift from President of Republic of Finland and his wife, to Empress Kojun when visiting Japan as State Guests in 1986

34
Glass Flower-set

Iittala (production), Alvar Aalto (design) / Finland
1985 (production), 1938 (design)
glass
total size 33.6×34.8×16.2
gift from the Prime Minister of Japan, to Emperor Showa in 1987

35
Glass bowl, “Lompolo”, pond along the river

Iittala (production), Tapio Wirkkala (design) / Finland
1985 (production), 1966 (design)
glass
26.8×27.3×9.8
gift from the Prime Minister of Japan, to Princess Chichibu Setsuko in 1987

Metalwork

36
Pair of silver candle sticks

A. Michelsen / Denmark
1920's
hammered silver
each d. 13.7, h. 22.0
gift from Minister of Foreign Affairs of Kingdom of Denmark and his wife, to Emperor Showa when visiting Japan in 1964

37
Silver tray

F.Hingelberg (production), Svend Weihrauch (design) / Denmark
c.1963
hammered silver
d. 41.0, h. 2.0
gift from King Frederick IX and Queen Ingrid of Kingdom of Denmark, to Emperor Showa and Empress Kojun in 1963

38
Silver bowl and pitcher

Georg Jensen (production), Sigvard Bernadotte (design) / Denmark
c.1971
hammered silver
bowl: d. 25.5, h. 8.5, pitcher: 13.6×10.8×15.0
gift from King Frederick IX and Queen Ingrid of Kingdom of Denmark, when Emperor Showa and Empress Kojun visited Europe in 1971

39
Silver cup

C.G.Hallberg / Sweden
1894
hammered silver
d. 8.0, h. 10.2
gift from President of Sweden-Japan Society, to Princess Chichibu Setsuko when visiting Japan in 1965

40
Deep gilt silver tureen with lid on stand

C.F.Carlman / Sweden
1928
hammered silver, gilding
total size 30.5×35.5×35.5
gift from Swedish residents in Japan, on the occasion of the Ceremony of Enthronement of Emperor Showa in 1928

41
Silver bowl

Birger Haglund / Sweden
1964
silver
d. 26.7, h. 11.8
gift from President of European Broadcasting Union, and President of Swedish Broadcasting Corporation, to Emperor Showa when visiting Japan in 1964

42
Silver tray with bird design

J.A.Tarkiainen (production), Pekka Piekäinen (design) / Finland
1985
hammered silver
d. 39.0, h. 2.7
gift from President of Republic of Finland and his wife, to Emperor Showa when visiting Japan as State Guests in 1986

43
Silver dish decorated with blue enamel

J.Tostrup (production), Grete Prytz Kittelsen (design) / Norway
c.1957
silver, enamel
d. 30.0, h. 3.8
gift from King Haakon VII of Kingdom of Norway, to Emperor Showa in 1957

44
Silver dish decorated with green enamel

David-Andersen (production), Harry Sørby (design) / Norway
c.1962
silver, enamel
d. 36.0, h. 5.5
gift from Minister of Foreign Affairs of Kingdom of Norway and his wife, to Emperor Showa when visiting Japan in 1962

45
Silver dish decorated with white enamel

David-Andersen / Norway
1978
silver, enamel
d. 27.3, h. 4.5
gift from H.R.H. the Crown Prince Harald and H.R.H. the Princess Sonja of Kingdom of Norway, to Emperor Showa when visiting Japan in 1978

Textiles

46
Rug, “SKATORNAS TRÄD”, Magpie’s Tree
Nordiska Kompaniet (production), Ulla Schumacher-Percy (design) / Sweden
c.1964
wool, hemp
181.0×155.0
gift from Minister of Foreign Affairs of Kingdom of Sweden and his wife, to Empress Kojun when visiting Japan in 1964

Reference objects

Reference no.1
Tea bowl, “Zui-Ko”, Auspicious Light
Prince Chichibu Yasuhito
1952
ceramic
d. 11.5, h. 7.3

Reference no.2
Bamboo tea kettle lid rests
Prince Chichibu Yasuhito and Fujiwara Ginjiro
Showa era, 20 c.
bamboo
large: d.6.8, h. 4.5, small: d. 6.0, h. 4.4

Reference no.3
Kaj Franck’s room at Nuutajärvi
Kato Hajime
1957
ink on paper
23.7×31.5

謝辞

本展の開催に当たり、下記の機関、諸氏にご助言、ご協力をいただきました。ここに記して深く感謝の意を表します。

Acknowledgments

We would like to extend our special thanks to the following individuals and institutions for their generous cooperation and support given to us in organizing this exhibition.

駐日スウェーデン大使館
駐日デンマーク王国大使館
駐日ノルウェー王国大使館
駐日フィンランド大使館
大多和弥生
永島明子
長久智子

Kosta Boda Art Gallery
Norwegian Icons
Tchai Munch
Ulf Stålhane

(敬称略、順不同)

北欧の工芸 ナチュラル 自然が生み出す

三の丸尚蔵館展覧会図録No. 71

編集 宮内庁三の丸尚蔵館
制作 株式会社 東京美術
翻訳 黒川廣子
発行 宮内庁
平成 28 年 1 月 9 日発行

© 2016, The Museum of the Imperial Collections, Sannomaru Shōzōkan

- ・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に^{ナチュラ}出典を明記してください。また，図版を出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

北欧の工芸 ^{ナチュラ}自然が生み出す

三の丸尚蔵館展覧会図録No. 71

編集 宮内庁三の丸尚蔵館
制作 株式会社 東京美術
翻訳 黒川廣子
発行 宮内庁
平成 28 年 1 月 9 日発行

© 2016, The Museum of the Imperial Collections, Sannomaru Shōzōkan